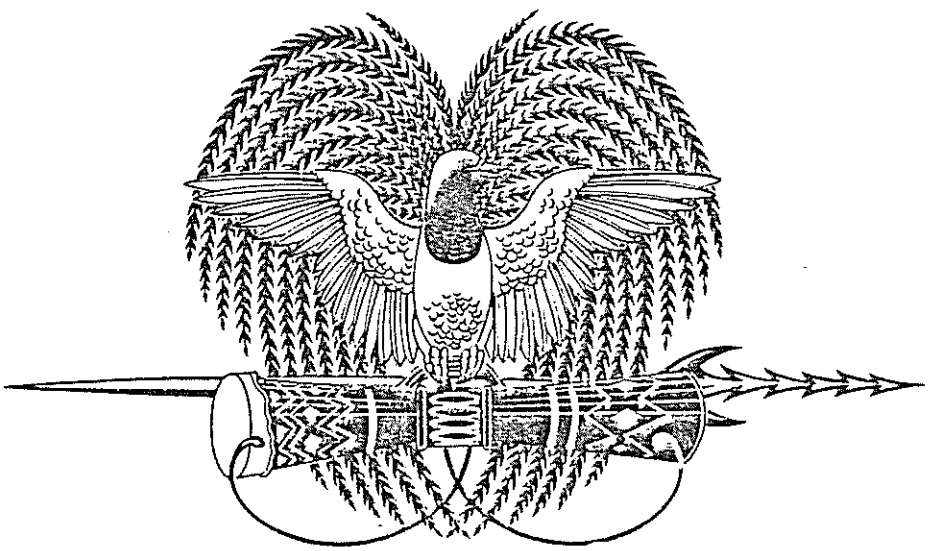
パプア・ニューギニア紀行



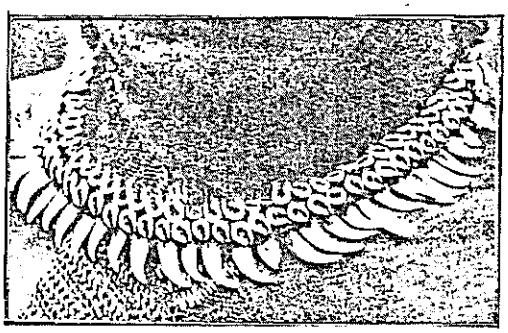
昭和６２年３月６日～１３日

寺 前 信 次

パプアニューギニア紀行　　目次

はしがき　・・・1
パプアニューギニアの概要　・・・3
3月6日（金）
マニラへ　・・・5
3月7日（土）
パートモレスビーへの途中
ビアク島」を慰霊　・・・6
ポートモレスビー　・・・7
太平洋戦争開戦当初のニュー
ギニア方面の戦闘経過と
モレスビー進行作戦　・・11
3月8日（日）
ポートモレスビー　～　ゴロカ　・・14
ラエ　・・14
ゴロカ　・・15
3月9日（月）
ゴロカと別離　・・17
高地の歴史　・・18
高地の白人　・・19
豚の放し飼い　・・20
ハイウェイ光景　・・21
部落間の殺人事件　・・23
墓と葬式　・・24
チンブの町　・・25
ミンテーマ村の見学　・・25
泥人間（マッドメン）のおどり　・・27
マウント・ハーゲン　・・28
3月10日
チャーター機　・・29
カラワリ・ロッジ　・・30
イーマス村の神に感謝の踊り　・・32
エンボインの役所と学校　・・33
クンディメン村のパン作り　・・34
秘境ロッジの夜　・・36
3月11日（水）
上流のイーマス村の小学校　・・38
結婚式　・・39
アウイン村の成人式　・・41
カラワリ別離の夜　・・43
3月12日（木）
カラワリからモレスビーへの帰途　・・44
ポートモレスビー　・・46
3月13日
帰路に就く　・・48
あとがき　・・49

小さな宝貝と豚の歯で作った首飾り



はしがき

私にとっては旅が解語の花であり、文化の母と言われる旅を続けて、「華胥の夢」を夢みる楽しみは、楽しみの中の最大なものである。

昨年は入院すること二回におよび、体調の整はないまま、本年１月に家族等とインドネシア方面を訪れ、やや自信を取り戻した時に、ワールド航空から雁書が舞い込んで来た。森も空も海も自然本来の姿を残し、パプア・ニューギニアは地上最後の楽園と記されていた。その一文に心は躍動し、輾転反則しながら、

中国の戦国時代、宋の国の一隅に生きた荘子の「胡蝶の夢」の物語りを思いだした。

彼は、うたた寝の夢の中で胡蝶となった。ひらひらと大気の中を舞うことの楽しさ、自分が自分であることも忘れて楽しみに耽った。現実もまた夢であり、夢もまた現実である。哲人は在るがままに在ることを考え、我々凡人も亦、与えられた今の環境や姿において、今を楽しむことこそ、本当に生きるという事ではないだろうか、と勝手な屁理屈をつけたのである。

春秋高くなると人間は病の器になり、人生は一炊の夢に過ぎないと、遠くを見物して歩く四方の志に、矢も楯もたまらない状態に陥ってしまった。

芭蕉の「奥の細道」にも、日月は百代の過客にして行きかう年もまた旅人なり、と書かれている。奥羽の旅に出かけた其の時におのれを同化させ、自己を旅そのものにすることによって、人生の淋しさを乗り越えようとした。私もその心境を師として早速ワールド航空に参加を申し込んだ。

二月中旬に健康診断を受け、胃カメラの検診をした医師は、旅行の延期を言い渡したものの、「死生命あり運は天に在り」と、其の言葉も「馬の耳に風」に過ぎず、思い立つた日が吉日だと決意したのであった。

私が華北戦線従軍時代の一時、生死を俱にした第３５師団が、昭和１９年３月にニューギニアへと転進を開始し、所属した歩兵第２１９連隊の一部（１ケ大隊）はビアク島に、連隊長以下主力部隊はヌンホル島に於いて、それぞれ刀折れ矢尽き、善戦空しく軍旗を奉焼して玉砕した。嗚呼悲哉。

肝胆相照らし、異域の鬼となった先輩、戦友の永眠するニューギニアには、心から鼓琴の悲しみがつのり、彼の地に足跡して慰霊の一端を捧げたい心境も亦、鵬程万里の旅の重要な目的でもあった。

馬革を以って屍をつつむと決意しながら、負薪の資に過ぎない私が今日まで流転の世に生き長らえ、人間万事塞翁が馬と思いつつ馬齢を重ねてしまった。

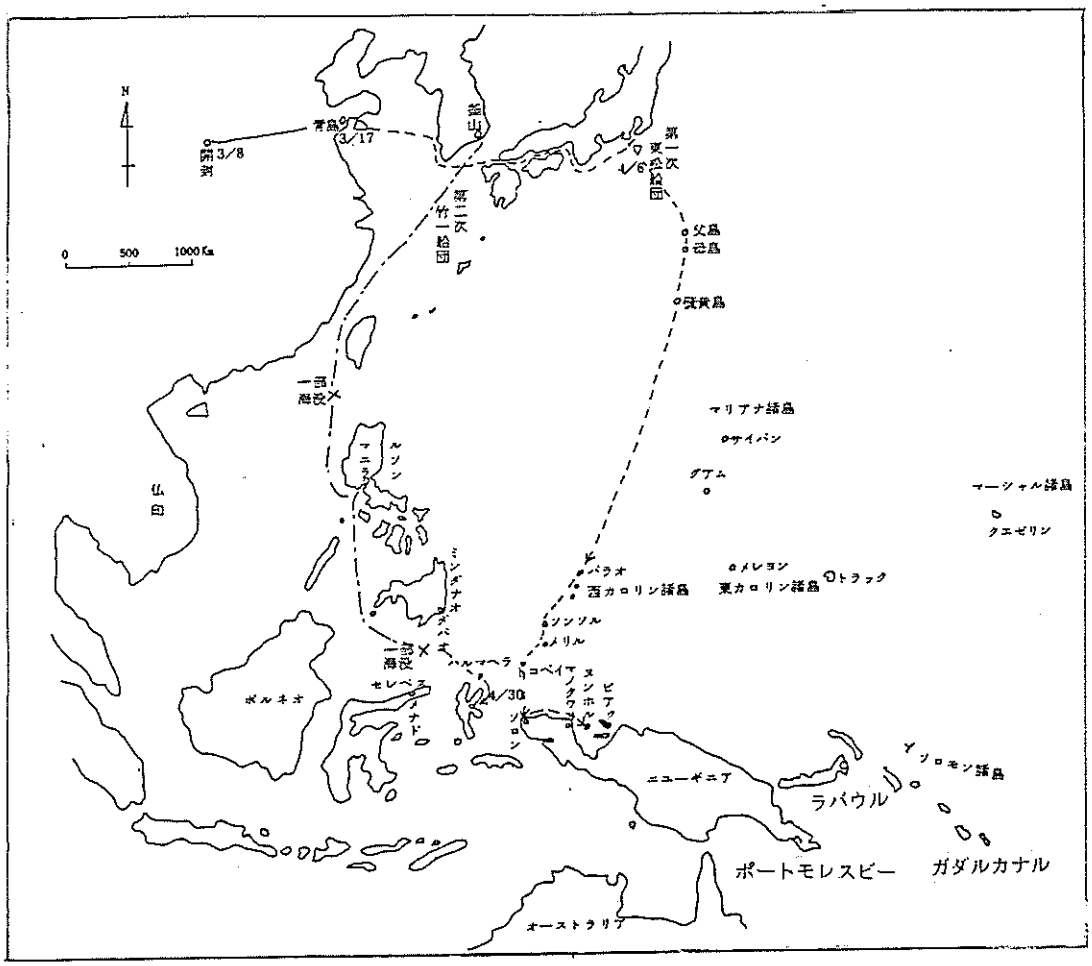
戦後の４２年間、一箪の食一瓢の飲の生活を続け、形影相弔う心境は歳月人を待たずと自覚させ、うどんげの華の開花を待った心地で鹿島立ちしたのである。

「孤掌鳴し難し」片手の手のひらだけでは鳴らす事ができない。即ち協力者（書籍を含む）を得なければ物事が成就できないと、毎回の旅の前に或程度の知識を求めることにしている。今回も二月に上京した折り、パプア・ニューギニアの書籍をあさったが見当らず、やむなく高価であったが１００万分の１の地図四枚と、ニューギニア戦記三冊を購入した。

また帝国ホテルの一階にあるニューギニア航空事務所にも足を運び調査したが、戦記物ばかりで参考になるものもなく、流石、秘境の国だと感じたのであった。

今回もまた蛙鳴蝉噪の拙文だが、旅を通じて我が眼で見、四方の人から聞いた知識を綴って我が思い出とすると同時に、知音の人達にも提供して友情を深めたい。短時日の旅であり、浅学の身のために正鵠を得ない点の多いことは勿論である。

第三十五師団豪北方面転進要図



パプア・ニューギニアの概要

（国土）赤道と南緯１０度の間にある、グリーンランドに次ぐ世界第２の島ニューギニア島の東半分と、周辺の大小７００もの島によって構成されている。日本の約１、２５倍の面積の此の国は、ニューギニア島を東西に走る中央山脈を界に、北部をニャーギニア地域（ニューブリテン島、ニューアイルランド島、ブーゲンビル島等を含む）、南部をパプア地域に大別される。

この中央山脈は、海抜４６９４米のウイルヘルム山を最高峰とするビスマルク山脈から、オーエン、スタンレー山脈へと連なり、つずれも４０００米級の高峰がつらなる大山脈である。火山が多く、河川は中央山脈より北に太平洋に注ぐセピック川、南はパプア湾及びアラフラ海に流れるフライ川があり、両地域には広い底湿地帯がある。

（人種）パプア・ニューギニアには５千年もの昔からアジアから移って来た人類が居住していたと考えられており、ハイランド地方の谷間では八千年以上も前の農耕集落の遺跡が発見されている。

その後カヌーでやって来たポリネシアやミクロネシアの人々、マレー系、ジャワ系の人々が混血して形成された。現在の住民の大部分はメラネシア系人種に属し、パプア族とメラネシア族に分けられる。（メラネシア人はポリネシア人、ミクロネシア人とともに太平洋３大民族の一つ）総人口は約３００万人と推定され、パプア地域に８０万人、ニューギニア地域に２２０万人が住んでいる。

（言語）公用語は英語とされている。しかし５００以上の部族が７００以上の異なる言語を使用しているため、一般に共通語として、現地化された英語のピジン語と其の他にモツ語が用いられている。

（気候）僅かのサバンナ帯を除き熱帯降雨林に覆われている。５月～１１月が冬（乾期）で、比較的乾燥しており、１２月～４月の夏（雨期）は高温多雨で、降雨量は大部分の地域で年間２５００ミリ前後、６０００ミリを越す所もある。海岸地帯では年平均気温が３０度を越すところもあるが高地では涼しく、平均気温で１０度程の差が両地域にある。

（歴史）ニューギニア発見の最も古い記録は１５１２年だといわれるが、通常、１５２６年、ポルトガル人のメネセスがニューギニアの北西岸に上陸し、パプアと命名した。（パプアとはマレー語で縮れっ毛の意）

１５４５年、スペイン人のレテスがニューギニア北岸に来航し、住民がアフリカのギニア沿岸の黒人に似ていたことからニューギニアと名付けた。

１６０６年、スペイン人のトレスが、ニューギニアとオーストラリアを距てる海峡を発

見（トレス海峡と命名）。これによってニューギニアが島であることが明らかになった。

１８２８年、オランダが西半分の領有を宣言。１８７３年、英国人モレスビーが現在のポートモレスビー地区を発見。１８８４年、ビスマルクは太平洋のドイツ人擁護のもとにニューギニア北東部を、イギリスは南東部を領有した。

１９１４年、第一次大戦が勃発するとオーストラリア軍はドイツ領に進攻し、ドイツの敗北により、旧ドイツ領は国際連盟の委任統治領としてオーストラリアに割譲された。

第二次大戦中は日本軍が此の地の一部を占拠したが、戦後パプアと単一の行政地域を形成し、１９４６年の国連総会において、信託統治領としてオーストラリア領となった。

１９６３年、西半分がインドネシア領西イリアン（現イリアンジャヤ）となる。１９７３年、豪から内政自治に移行し、１９７５年３月６日に独立した。同年１０月１０日に１４２番目の国連加盟国となる。

（産業）パプア・ニューギニアの産業は、農業と鉱業の二つを主産業とし、中でもコプラ、コーヒー、ココアの生産高は大きく、銅鉱石とともに国の経済を支えている。コプラはヤシの実を割って中の脂肪を取り出したもので、重要な食料資源にもなっている。その他、ゴム、紅茶、香辛料などのプランテーションが営まれ、コプラ油、ヤシ油などとともに、主な輸出品となっている。現在、米とサトウキビの栽培計画も検討されているらしい。

天然資源に恵まれ、全輸出量の３分の２は鉱産物で、中でも銅鉱石は群を抜き、パプア湾では石油や天然ガスの埋蔵も確認されている。その他、国土の９０％を覆う森林資源、エビやマグロ、カツオなどの水産資源にも恵まれている。

日本企業の進出も次第に増え、輸出の３割を占める日本との貿易は年々上昇し、１９７９度以来、日本は第一位の貿易相手国となっている。

（観光）大小７００もの島々からなるパプア・ニューギニアは、地上最後の楽園といわれ、秘境と呼ぶには色鮮やかな陽気な世界であり、訪れる人をワントク（ピジン語で親友の意）として迎えてくれる。

数多くの部族に伝わる伝統的な原始美術のエネルギーは、村々に建てられた精霊の家や、シングシングと呼ばれるハイランド地方の戦いの踊りで代表され、極楽鳥や有袋動物、野生の蘭は熱帯情緒を魅了させてくれる。

パプア・ニューギニアの旅

3月6日（金）

マニラ　へ

待つ間が花だったが、浮き世は心次第と啓蟄の日の六日に成田を離陸した。フィリッピン航空４３１便は定刻の１０・００にマニラへと図南の翼を飛ばし、快晴の空の旅は４時間３０分である。機内は五分の三程度の乗客に過ぎず、シーズンオフと比国の政情不安の影響が重なり、此処彼処にジャパユキさんの帰国する若い女性がはしゃいでいた。

我々一行は１１名という最低限の人員構成で、故障だらけの我が身に鞭打ったものの、左上博の不随状態は依然として癒えず、諦めは心の養生だと、くよくよしない事にした。

航路は八丈島から南大東島を通過し、機内食は腹の皮を張らせて自然に眼の皮がたるんで行った。

アナウンスはマニラ到着２０分前を告げた。瞰下する滄海にバターン半島が突出し、コレヒドール島がくっきりと網膜に映っていた。何れも第二次大戦当初の激戦の地で、奇しくも此処から逃避行したマッカサーが、捲土重来を期して反攻の基地としたポート・モレスビーに、明日の午後に訪れる因縁の旅となった。日本からのモレスビーへの直行便や、香港からの便は無くなり、今日ではマニラ便だけとなって、此処に一泊しなければならなくなったのである。開戦当時を偲ぶのに相応しい感じがする一方、我々にとっては、やり切れない感じの方が強い。

定刻の１３・１５にマニラ空港に着陸。昨日は積雪２０糎の北陸を発ったが、此処は３０度を越す極暑で、一段と地球が狭くなった感じだ。

去る１月２２日、首都マニラで起きた農民デモへの発砲事件は百人を越す死傷者を出し、一般市民に強い衝撃を与えた。再び２７日未明、政府軍内のマルコス前大統領支持派の将兵五百人が反乱を起し、放送局を占拠して政府軍と対峙したほか、空港近くのビリヤモル空軍基地でも銃撃戦が発生し、一人が死亡、八人が負傷している。飢えた犬は棒を怖れずという状態だろうか。

此のような流血事件に比政権は苦慮したが、２月２日の新憲法に対する国民投票は、７６％の圧倒的多数で承認された。兎に角、政治を行う者が正しなければ、人心の安定なしと、他山の石としたいものである。

バスは特権階級の高級住宅街を通過して先ず案内された所が、皮肉なことにアメリカ兵の墓地であった。如何なる理由があるにせよ、我々日本人には日本人墓地を案内し、慰霊

の機会を作らない現地ガイドに我が心中は穏やかではなかった。地理的にホテル近辺地であっても、外に訪れる場所がある筈だ。今日の日本の繁栄の陰には幾多の犠牲があったことを強く訴え、銘肌鏤骨すべきである。

続いて１５２１年、スペインのマゼランがマニラに上陸し、１３年の歳月を費やして築いた城塞を見学した。要塞の上に登って１８９８年の米西戦闘の状況を想起し、夕焼けの美しいマニラ湾を眺めながら、シラヒス・インターナショナル・ホテルに着いた。

総ての高層ビルや高級住宅地が僅か五百人たらずの財閥が握る現状を見て、アキノ政権の前途に暗黒を感じるばかりでなく、非道で得た富貴は浮雲の如しと言う格言は、此の国には適用しないような感じがする。上医は国を医し、次ぎに疾病を治すべきだと申して置きたい。

日本のテレビは屢々フィリッピンのニュースを流している反面、比国の人たちは若王子氏の事件に無関心ばかりか、知らない人が大多数と聞き、日本人として同氏の安否が気がかかりである。早期救出を祈って止まない。

僅か一日の旅にかかわらず身体にだるさを覚え、かつ稍々貧血症状も加わり、待望久しいパプアの旅に備えて早く床に就いた。

３月７日（土）

ポート・モレスビーへの途中に「ビアク島」を慰霊

恋人に逢う時は遠い道程も苦にならず、「千里も一里」というような朝を迎えた。未だ暗い０４・００のモーニングコール前に眼を覚まし、０４・３０、ホテルを出発して空港到着の頃に黎明となった。我々の旅立ちを祝福しているかのように、南国の真っ赤な太陽は煌々として昇り始めた。

ニューギニア航空は週何便か知らないが、乗客はほぼ万席に近く、フィリッピン人が断然多い。それだけ比国との交流が盛んだ。オーストラリヤの行政時代は、アジア人のパプア・ニューギニアへの入国ビザは簡単に取れなかった。独立後、白人よりも安い給料でフィリッピン人やインド人が雇用され、手に職を持った彼等は、自国の何倍もの給料が貰えるということで応募した。中でもフィリッピン人は自国の人を呼び寄せて増加し、今や華僑と争うほどの数となったことが、交流の多い原因である。

搭乗待合室で若い日本の青年が私に声を掛け、一人でパプアに旅するのかと尋ねた。彼は商社に勤めて主として木材の買い付けに従事し、パプアの知識を聞かせてくれたが、今

次旅行の大きな参考になったのである。未開発の国でありながら案に相違して物価は高く、交通が至って不便なために奥地では未だに物々交換が主体を占め、日本円や米ドルも使用できないということであった。

定刻の０７・００、極楽鳥を機体一杯に画いたＰＸ０１１便は、大翼を南の空に向かって上昇させ、南冥の海原へと直行した。機上の人となるや否や、スチュアーデスの美しいロングドレスは私の眼を引き付けていた。華麗な極楽鳥を染め抜いたユニフォーム姿は、自然に地上の楽園に我々を誘導しているようで、「雄大な野鳥の宝庫」「地上最後の秘境」の光景を彷彿させたのであった。

座席に備付けてある航空地図を開いて見ると、航路は僥倖にもビアク島上空を通過していた（ビアク島はニューギニア島の西北部、２頁地図参照）。ビアク島には国際空港がある関係から、通過地点となっているようで、これ程の幸運なことはない。本当に運は天に在りだ。

通過時間が判明しないため、ビアク島上空を通過する時刻に、スチュアード氏に連絡を依頼したところ、彼は心よく承諾してくれた。我が思いが彼を通じて亡き英霊に通じたように、春秋に富んだ華北時代の戦友の壮姿が走馬灯のように脳裏をかすめ、五里霧中になって過去の糸をたぐり続けた。

現地時間の１２・００を過ぎたころ、スチュアード氏は私を後部の窓際に導き、ビアク島を指差してくれた。連隊の歴史を読み、また今回手に入れた地図の通りの島嶼の形状から、ビアク島に相違はなかった。

鴻鵠の志をいだき、鬼哭啾啾として匪躬の節を尽くされた英霊に対し、虎視耽々と凝視しながら、応接に暇がないほど心の中で合掌し続け、次第に遠ざかって行く滄海の一粟の島影を、目頭が熱くなるほど見送った。

連隊主力の玉砕したヌンホル島は西方約１００キロ地点に在り、島影も望遠することはできない。太陽の燦々と輝く紺碧の空に向かって慰霊の念仏を唱え、生存者を代表して掌を合わせたのである。私が中隊長をつとめた隊の守備した小島も亦、遠く北に在って瞰下することはできず、孤島に眠る在りし日の英姿を瞼に浮かべて黙祷を捧げたのであった。

ポートモレスビー

至誠天に通じて望外の慰霊を終え、山重なり水複した幽境の上を順調な飛行が続き、ニューギニアの大きな島を横断してアラフラ海に望むと、サンゴ礁に囲まれた海岸線は色彩も鮮やかな景観を呈し、美麗な蒼海と緑の海浜が調和して、絵に画いたような明媚が網膜

に焼き付いていた。

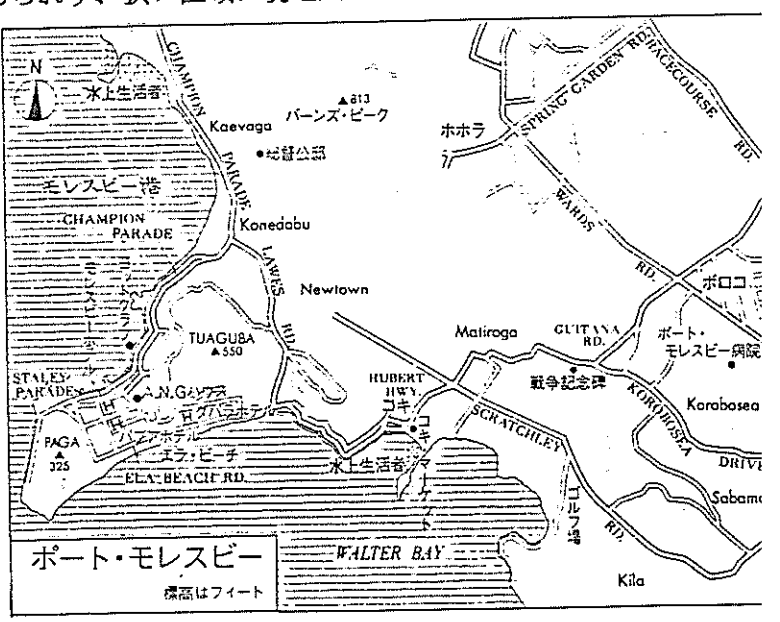
隣座席の二人のオーストラリア人もまた陽気一杯に話しかけて、モレスビーの知識を盛んに教え、時間の経過も忘れてビールをすすめていた。第二次大戦では不幸にも豪軍ともニューギニアに於いて、血で血を洗う陰惨な死闘を演じた怨念を捨て去り、こうして世界平和の輪を拡げている会話は、微笑しい光景であった。

大海渺茫の彼方のポートモレスビーには、現地時間の１４・００に無事着陸した。五時間の長い空の旅にかかわらず、ビアク島の慰霊や豪州人との心の触れ合いで、満たされた旅だったと感謝しつつ、税関通過の手続きをしていた。丁度そのとき偶然にも再び商社マンと顔を合わせ、友好親善を切望し握手をして離別した。

ポートモレスビーという名称は第二次大戦当初の華北時代、日本海軍の渡洋爆撃で始めて耳にしたと記憶しているが、詳細な知識は戦後になってからである。貧弱なジャクソン空港は、首都の表玄関にしては誠にお粗末で、今後の発展を期待しながら空港を後にした。１２・８キロの都心に通ずる広い道路は、熱帯の緑に覆われて人家は少なく、途中の中産階級の村ボロロを過ぎる頃から視界が広がり、バスは市内最大のコキ・マーケットに一行を案内した。

市場には簡単な日除け程度の建物が数棟あり、地面に汚いアンペラ（ヤシの葉で編んだもの）が敷かれていた。初めて拝見した小さい果実から、サツマイモ、タロイモ、ヤムイモ、サゴヤシ、トウモロコシ、バナナ、ヤシの実、南瓜、西瓜、青野菜等と種々雑多な物を並べ、入れ墨をして胡坐をかいた女性達がのんびりと商いをしている。

異臭が漂って鼻を覆わずにおられず、狭い区域に現地人がひしめき合い、大変な活気を呈していたが、我々には衛生観念が先に立って食指が動かない。物珍しい光景は、市場で買った食料品を、頭に大きな網袋を引っ掛けて歩く女性達の姿であった。



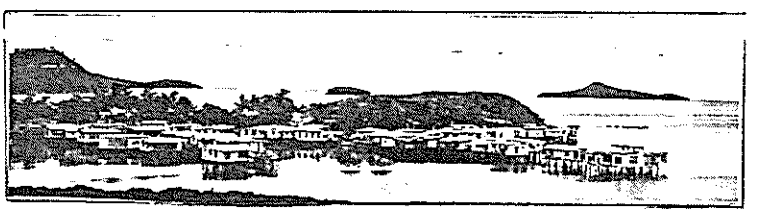
モレスビーの住民の台所を賄う市場だけに物資は豊富だ。特に今まで世界に眠っていたイモ類が、南方の人達に貢献した歴史を目の当たりに見て、日本軍が飢えを凌いで戦った

状況を窺い知ることができたのである。

市場の一角で髭もじゃの黒人が玉突に精を出す一方、その横では一台のテレビに黒山のように人が寄り集まり、未だに文明の夜明けの遠い首都の姿を如実に表わしていた。然しながら、想像していた裸と裸足の光景は見られず、さすがモレスビーだけに、汚いながらシャツやツッカケを履いていたのは印象的であった。

コキ・マーケットを去ってエラ・ビーチを走ると、左手の浅瀬に建った水上生活者の集落が見えてきた。掘っ建て小屋のようなもので、時化の時にはどうなるのかと、他人事ながら心配してカメラに収めた。

高層建築の建ち並ぶ右手の市街地を眺めながら、バスは標高３２５フィートのパガ岬の台上に登った。この高台から振り向くと市街の全貌が展望され、役所やホテル、白人達の白亜の建物が際立つて見えていた。日本大使館は鉄筋三階建の三階を間借りしており、後刻マラリヤの特効薬であるキニネを渡され、御礼を申しておきたい。（写真は水上集落）



去る二月、我が国の倉成外務大臣がモレスビーを訪れ、二月十二日の北国新聞の夕刊に次ぎのような記事が掲載されていた。

（パプア・ニューギニア。美しい羽を持つ極楽鳥で知られる南太平洋最大の国だ。首都ポートモレスビーはいま慢性的な治安問題に悩まされている。同行記者団が泊まったホテルにも、武装警官が徹夜で警戒していたのには、いささかびっくりした。

パプアニューギニアは十二年前の１９７５年に独立したばかり。国内経済も貨幣経済はまだ全体の三割程度と地についていない。地方からモレスビーに集まった若者たちが職もなく町にあふれ、勢い犯罪に走ってしまうようだ。

しかも人口十四万の首都を守る警察官は八百人足らずで、多発する犯罪には「焼け石に水の状態」という。このためウィンティ政権は一昨年六月から昨年十一月までモレスビーに非常事態宣言を発し、「防戦」にあたったほどだ。

こんな治安状態だからパプアニューギニアに住む外国人にとって、防犯対策は生活面での最優先事項となる。外国人居住地域は厳重な鉄条網で仕切られ、家々の周りにも鉄条網と二重の手だてが構ぜられている。その上、家の窓という窓にはすべて鉄格子がはめられるというものものしさ。

日本人は約三百人が住む。「夫が出張する時には、妻が他の家に泊まり合う制度があります」とある夫人が話してくれた。庭にはどう猛な犬を放し飼いにし「毎日、血のしたた

るような生肉をたべさせている」という笑えない話もあった。救いといえばウィンティ首相を先頭にした治安回復に向けた強い意欲だ。パプアニューギニアは今、近代国家への脱皮を目指して手探りの努力を続けているようだった。）（原文のまま）

高台に聳え建つトラベロッジ・ホテルに四時頃に入った。小規模ながら一流ホテル並みの設備は申し分なく、前後に展望される海面は強い太陽の日差しを反射して「海波を揚げず」というか、記者の記事とは正反対の天下泰平の眺めであった。

此のような景観の優れた山河襟帯ともいうべき豊かな自然は、何にも替え難い天然資源であり、奥地の秘境と相俟って、観光立国を目指して客の誘致に期待しつつ汗を流した。

聞くところによると、パプアニューギニアの観光客数は、日本、カナダ、アメリカ、オーストラリアの順で、年間三千～四千人程度という。日本人の多いことは激戦場だっただけに、慰霊団の訪問が多くを占めていると思われる。今回のワールド航空のツアー参加を機会に、熱い眼差しのラブコールを日本に向けられんことを念願したい。

今日は土曜日のためにカトリックの国は休日だ。勿論買い物をする積りはないが、記者氏の記事を確かめたいと、一人ながら高台を降りて海岸通りから商店街を散策した。街を行く現地人は、黄色人種の私に対して愛想が良いように肌に感じたが、防犯対策の鉄条網やフェンスは記事の通りであった。

オーストラリアを始めサモア、フィジ方面へ航行する桟橋にも、同じように鉄条網が施され、なお且、警備員が警戒に当たっていた。また街の中心にあった公園では、現地の人達の家族連れが芝生の上で寝そべり、写真撮影の許しを乞うたところが、笑顔で承諾してくれて早速シャッターをきった。

白人達への怨みは、今までのあくどさに基因するのではなかろうか。現在働いている白人の中には、中等教育も受けていなくとも白人というだけで、中央、地方の責任者の椅子に坐っている人が多いらしい。白人に支配されてきた彼等にとって、盲目的に白人を偉いと思っていた其の反発が、戯にあふれた群衆心理となり、暴動的犯罪行為となったのではないだろうか。

熱帯らしい花の咲き乱れる寂しい街を一巡し、山手の道路に差し掛かると、デスコの中の黒人達は奇声をあげて騒ぎまくっていた。陽気な彼等は私に満面笑みを浮かべて手を振り、特権階級に対する怨念はフィリッピンと変わりはないような感じがしたのである。

また太平洋戦争の最大の被害者は此の国の人々である。米豪連合軍せよ日本軍にせよ、勝手に上陸して三年間も戦闘を続けた。自己の平和を守り、外敵を阻止しようにも弓矢だけでは太刀打ちができず、彼等自身も銃弾に倒れて老若男女約五万人が犠牲となった記録がある。誠に申し訳がなく謹んでお詫びしなければならない。

太平洋戦争開戦当初のニューギニア方面の戦闘経過とポートモレスビー進攻作戦

今回モレスビーを訪れた機会に上記の一項を設けて、当時の将兵の苦闘を偲びたい。

我々年代の戦争体験者ばかりでなく、戦争を知らない戦後の人々さえも、ガダルカナル島やインパール作戦の戦闘は知っている。一方、ニューギニアで戦った数十万の軍隊が満身創痍となって、悲運な戦いを継続すること三年に及び、死の恐怖にさらされながら、生の望みのない戦闘を戦わされた陰惨さは、前者の陰に隠れて余り知られていない。

開戦から間もない昭和１７年１月２３日、当時、大本営直割だった南海支隊（長・堀井少将）がラバウル（パプアニューギニア領）に奇襲上陸した。引き続く３月、海軍の少数部隊がニューギニア東部のラエ及びサラモア（ラエ東南）に、飛行場建設の目的で上陸した。これがニューギニア本島への最初の足跡である。

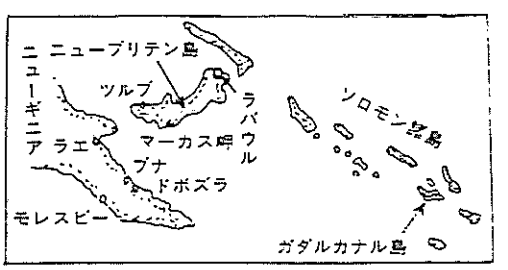
真珠湾の奇襲に成功した海軍は、陸軍と呼応して太平洋の広域に展開し、豪州を攻略占領することを提案したが、これには十数個師団の大軍が必要だと陸軍は反対した。その妥協案として、マッカーサーの本拠地であるポートモレスビーの攻略となった。豪州と米国との連繋を遮断する目的である。

１７年５月、南海支隊を乗せた日本の大艦隊が、ポートモレスビーに向かっている情報を連合軍がキャチし、彼の有名なサンゴ海海戦となった。其の結果、敗北となった我が艦隊はラバウルに引返し、モレスビーの陸路攻撃が考案された。

一方、太平洋の最大の戦略要地であるミッドウェー海戦は、６月５日、連合艦隊が敵の機動部隊に捕捉撃破され、日本海軍は開戦１年にして其の優位を取り戻すことができず、日本の敗色は濃厚となってしまった。この海戦の失敗は国民はもとより陸軍にもひた隠しにされ、陸海軍の間に不協和の声が生じたのである。

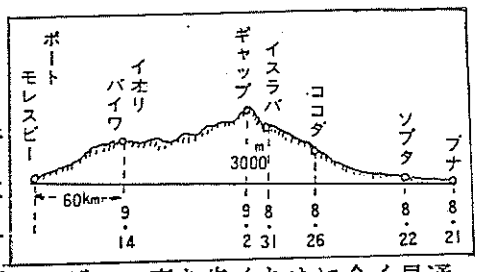
このような状況の中で、６月１８日、海軍陸戦隊三千余人がガダルカナル島に上陸したのは皮肉であった。

７月１５日、海軍がミッドウェーで大敗を喫したため、大本営はポートモレスビーの陸路攻略を決定し、７月２０日、横山先遣隊はラバウルを出発、２１日にニューギニア東部のブナに上陸して偵察行に移った。８月１９日、横山先遣隊を併せて指揮する南海支隊は（長・堀井少将）ラバウルを出発、２１日にブナに上陸してモレスビー陸路攻撃の作戦が開始された。



ブナとモレスビー間のオーエンスタンレー山は四千米の高山でジャングルに覆われ、深い渓谷や

荒れ狂う急流があり、季節によっては豪雨が続くという。泥と岩の悪路に垂直に近い崖があり、一人が漸く通過できる所に直径二米もある大木が累々と倒れ、行軍は一日に数キロも進まなかった。更に武器・食糧は人力によらねばならず、栄養失調、マラリア、アミーバー赤痢の他、寒気のために倒れる者が続出した。ジャングルの底を歩くために全く見通しがきかず、歩行は困難を極めて遂に食糧の欠乏をきたした。（上の要図は経過を示す）



これに反して連合軍はジャングル地の空中輸送に成功して日本軍に打撃を与えた。米軍資料によると、日本軍のオーエンスタンレー山越えの進攻作戦を知ったマッカーサー司令部は大恐慌をきたし、バターン半島やコレヒドール島の再現かと、マッカーサーの手が震えていたという。

９月２日、マウント・ビクトリアのギャップ峠を占領した南海支隊は、夜のモレスビーの灯を見て将兵一同は歓喜し、９月１４日、モレスビーまであと６０キロ地点のイオリバイワに到着し、モレスビーの町の灯が眼下に見えたのであった。

しかしながら日本軍は既に食糧は尽き、軍の後退命令によって再び険路の後退を開始したが、連合軍は一個師団をブナ地区一帯に逆上陸させて退路を遮断し、死闘に次ぐ死闘の末、堀井少将を始め殆どの将兵が壮烈な戦死を遂げた。

当初六千名であった南海支隊の生存者は、僅か二百名足らずという悲惨な戦闘であったが、玉砕に等しいモレスビー陸路作戦は、制空権のない日本軍が機動力を無視し、歩くという戦法しかなかったのであった。

若しモレスビーに突入したとしても結果は同じだったと思うと、全般から判断して上層部の方針に疑問の残る戦闘である。謹んでご慰霊を申し上げたい。

ガダルカナル島方面の戦闘経過は、６月１８日、我が海軍陸戦隊が上陸したのに引き続き、８月１６日、海軍陸戦隊百余名に陸軍の一木支隊九百余りが、トラック島から駆逐艦六隻に分乗してガ島に急行した。

連合軍は其れ以前の６月７日、ガ島に上陸して飛行場を建設中であった。飛行場の占領を目的にした日本軍の攻撃は残敗し、８月２１日、一木大佐は自決して日本軍の戦死者は７８６人に及んだ。連合軍の死者は３５人に過ぎない。

８月３０日、一木支隊の残りの千人がガ島に上陸し、引き続く３１日に川口支隊（長・川口少将）が、９月１５日に第二師団が、１１月６日に第三十八師団が多くの犠牲を払って上陸した。

ここで日本の陸海軍３万余と連合軍６万の戦闘となったが、制海、制空権のない日本軍

は補給の困難と飢餓と悪疫によって苦戦死闘の連続であった。

翌１８年２月８日、地獄の底にあったガ島の生き残りは、奇跡的に撤退を完了したのであった。我が方の上陸３１、４０４人のうち死亡は２０、８６０人。連合軍の死亡は千人に過ぎなかつた。

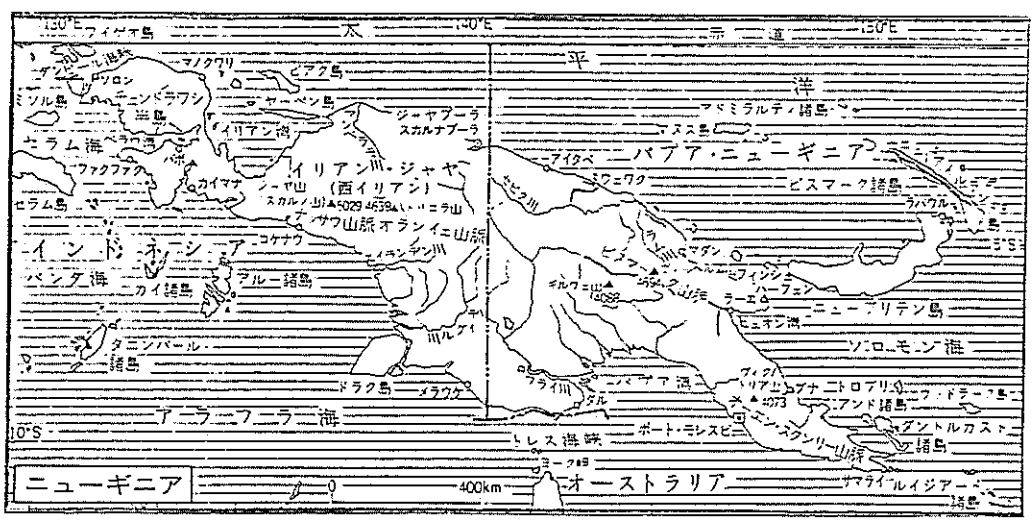
昭和１７年１１月１６日、第八方面軍（長・今村大将・司令部ラバウル）が新設され、その隷下の第十七軍（長・百武中将）はガ島方面を、第十八軍（長・安達中将）はニューギニア島の東半分を担当した。

同年同月同日、第二方面軍（長・阿南大将・司令部・アンボンからメナド）も新設され、その隷下の第二軍（長・豊島中将）はニューギニア島の西半分を、第十九軍は北は比島の南から西はマカッサルとロンボック海峡までを担当した。

現パプアニューギニア方面を担当した安達第十八軍隷下の第五十一師団は、１８年１月８日ラエに上陸し、同じく第二十師団は１８年１月、ウエワク（セピック川河口）に、同じく第四十一師団も１８年２月、ウエワクに上陸した。

安達第十八軍は連合軍の蛙飛び作戦によって寸断包囲され、三年近くの間にわたり、凄惨な死闘を続けて、当初１５万人だった兵力が終戦時には１万人に過ぎず、他に例を見ない激戦を展開したのであった。

第十八軍の詳細な戦闘経過と、他の方面の戦闘経過は省略する。



此の第五十一師団の「烈風枯葉を掃う」ような大軍に対して、「死を視ること帰するが如し」と戦った数々の戦記は、ただ涙なくして拝読できなかったのである。

マーカム川の河口にあるラエはパプアニューギニアの第二の都市で、北海岸の商業の中心地ばかりでなく、高地各地の海への玄関口である。街は第二次大戦中に大部分が破壊され、現在のラエは戦後の都市計画に基づいて再建されたものと云われている。

飛行場の周囲から街のいたる所に、熱帯性の植物の繁茂している光景が見えていた。平和に育つ此れらのヤシの木は、彼の激戦の歴史を知っているだろうか。感胸がつまり０８３０に離陸してゴロカへと飛び立った。

ゴ　ロ　カ

ラエからゴロカまでは直線距離にして約１９５キロである。マーカム川に沿って西にコースをとると、茶褐色をした河床や大草原からジャングル地帯へと続き、其の南北にある山脈は東西に走っている。

長く延びるマーカム川の沿岸に、第二十師団（京城編成）は道路の建設に着手して、ラエの第五十一師団救出作戦に尽力した戦記が私の脳裏を刺激していた。然し全てが「渇して井戸を掘る」式の手遅れ作戦に過ぎなかったようだ。凝視している眼下一帯は「荘子一たび去ってまた還らず」と戦った地かと、更に血眼になって注視していた。

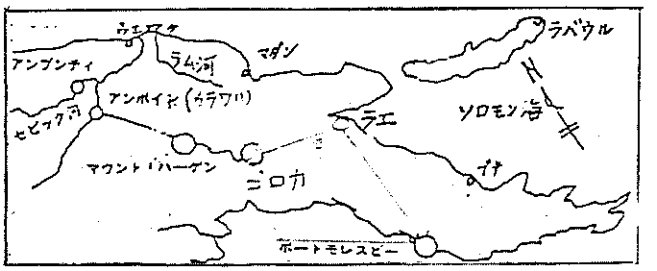
０９・１０、田舎らしい焦茶色のゴロカ空港に着くや否や、高地のパプア青年二人が正装して一行を歓迎していた。全くの驚きと感激であった。頭は美麗な鳥の羽根で覆い、首は美事な貝や動物の牙で飾り、腰は腰ミノをまわし、上博には色彩豊かな植物の葉を巻き付けていた。いよいよパプア観光のハイライト、雄壮なハイランドに踏み込んだ感じが肺肝一杯に漂い、彼等をもの珍しく見張るばかりであった。

小さい空港の周辺に僅かな家屋が点在する町並みを、バスは五分ばかりでバード・オブパラダイス・ホテルに到着し旅の疲れを癒した。ホテルの外観は素朴な山間僻地の宿泊所のように見受けられたが、案に相違して室内の設備はモレスビーに負けず劣らずである。高地の此の町にまで観光開発が浸透し、心地よいサービスは是れからの旅に安心感を与え魅了の期待をはずませていた。

玄関ロビーの各所に極楽鳥の模型が吊してあり、昼食は屋外でのバーベーキューをパラソルの下で味わった。日中の太陽は焼き付くように照り、気温は既に３０度を超して衣裳替えしなければ耐えられないほどであった。

ホテルの隣には鉄筋の州政府の建物が他を睥睨するように建ち、東部高地の町ゴロカは

3月8日（日）



ポートモレスビー　～　ゴロカ

０７・２５発のＰＸ１８６便にて第二の訪問地になっているゴロカへと飛翔した。当初は蛇行した河川が見え隠れしていたが、オーエンスタンリー山脈を越える頃から機は上昇し、雲上の世界では高峰の一部しか見えない。

前記の通り、南海支隊の悪戦苦闘した受難の地域を想起すると、「一樹の陰一河の流れも他生の縁」と思えてならないが、残念ながら瞰下することはできなかった。

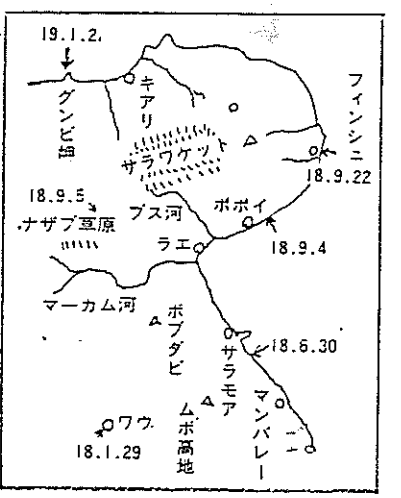
飛行すること３０分、美しい海岸が私の眼を引き付けていた。ソロモン海の一部であるヒュオン湾だったのである。

ラ　エ

０８・１０に搭乗機は着陸し、アナウンスは「ラエ」を伝えた。旅行日程には経由までも記載はなく、ここで初めてラエ経由のゴロカ便であることが判明したのである。

ラエは是非とも見たいと念願していた地の筆頭であった。これは絶好のチャンスとばかり機外に飛び降りて、四周を眺めて戦記を想起したが、二枚のシャツターをきる時間しかなく、帰路に期待をかけて機内に戻った。

昭和１７年３月、飛行場建設の目的で海軍の陸戦隊の一部が上陸した。前記した南海支隊のモレスビー陸路攻撃が発火点となって連合軍は逆上陸し、敵は逐次兵力を増強した。南海支隊の救援のために１８年１月８日、第五十一師団（宇都宮編成）がラエに上陸したが、以後、悲惨な戦闘が間断なく展開し、遂に北方に聳える三千米級のサラワケット山系の山越えを余儀なくされ、悲運な運命を辿ることになった。



詳しい戦記は割愛するが、東方の逆上陸した連合軍との激突に加えて、１月２９日、ラエ南方６０キロのワウ（金の産地で飛行場）にも敵の大部隊が空輸され、９月４日、ラエ北方のポポイにも上陸し、更に９月５日、ラエ西方３０キロのナザブ草原に空挺部隊が降下し（太平洋戦争最初の空挺部隊）、四面楚歌と形容するか、完全に包囲されてしまった。（右の要図参照）

独立国を思わせるくらいだ。オーストラリア行政時代は、州政府の建物よりも白人役人たちの住居の方が立派で、役所そのものはバラック建てのお粗末な物だったらしい。何処の植民地も同じような経過を辿っている。

暫く休憩の後、市内観光に出掛けることになった。ホテルの前では現地人の行商たちが動物の角や牙で作った首飾り、原始的な弓矢、頭に引っ掛けて運ぶ網袋等の民芸品を並べのんびりと小さな商いをしていた。

彼等行商人ばかりでなく、町を行き来する人の身に付けている物は、簡単な肌着だけで裸足だ。勿論バスの運航もないから総ての人が裸足で歩いている。モレスビーと比較してこれほど生活程度に雲泥の差が生じていたのであった。

日曜日の今日はいずれの店もシャツターを下ろし、現地人たちは何の目的があるのか人の往来が激しく、此処でも女性は網袋を頭に引っ掛けて買い出しだ。女性だけが働き、男性は仕事もせずに、ぶらぶらしている姿が眼にとまり、南国の未開の国の特徴を現わしていた。矢張り男尊女卑、一夫多妻である。

広い道路に大木の並木が印象的で、「町が道路か道路が町か」と形容したい寂しい街道を通り、バスはマーケットに案内した。モレスビーのコキ・マーケットよりも稍々小さく売られている品も大同小異だが、自然に黒い皮膚に入れ墨をした女性に眼が注いでしまった。やりきれない異臭は我慢できず早々に退散した。（下はマーケットの一部）

次ぎは博物館の門を潜った。数千年前の石器時代、準石器時代の古い物が展示され、狩の道具や土器類、戦闘用の面や楯などから生活用品など、非常に興味のある物ばかりで、地上最後の楽園の様相を自然に教示していた。しかし館の一隅に日米の兵隊が使用した兵器や鉄帽、それに日章旗までも展示してあり、肩身の狭い思いをさせられてしまった。これらは此の国の人達にとっては生きた歴史だが、反面、我々は何時までも会稽の恥をそそぐことは出来ず、新ためて戦争の罪悪を感じたのである。

首狩りの習慣は、奥地の方では１９７０年頃まで行われていたと説明があった。首狩り

に出陣する若者は、ツルを口から飲み込んで胃の中に押し入れ、吐き出した血を見て血気の勇を奮い起たせ、親兄弟と決別したというから地球最後の蕃民かも知れない。

バスは引き返して病院へ案内したが、我々一般人は貧弱な病院を見学する値も知らず、院内に入ることを遠慮した。運転手も兼ねたガイドは見せる所もなく、時間つぶしに廻ってくれる好意は理解してやらなければならない。（右は博物館の一部）

最後に市内を見おろすシタニの丘に登った。赤土の深い皺の急坂は、我々は逡巡して尻込みするが、彼は無謀にも度胸を決めて一挙に登って行った。視界に見えるのは飛行場と其の周辺の疎らな村落だけで、標高１、５３０米のゴロカは近代都市にはほど遠く、人口１２、０００の町にしては寂しい高原の町だ。

１９４８年、ヨーロッパ人が初めてコーヒ園を開拓したしたのがゴロカの始まりで、６０年代の半ば頃から白人や役人、そして商人の人口が急に増加した。肥沃な土地に恵まれた上、道路は海岸からゴロカを通過して西に延び、他の地方に比べて条件がよかった。

奨励した換金作物のコーヒ栽培が成功し、原住民たちが現金収入を得出したばかりか、彼等自体が協力してコーヒ栽培を始めた。ゴロカの原住民の経済成長に刺激された他地方の高地人もコーヒ栽培を始め、ゴロカは其の中心地となって発展してきた。

東部高地の経済成長はゴロカに始まり、十分な土地と労力が発展の基礎となった。現金収入を得ようと仕事を求めて、他の地方からもゴロカに人が集中したのである。また教師養成の師範学校もゴロカに建設され、一段の発展が期待出来るのではないだろうか。

経済発展の原因の他の一つは、ゴロカから西へと道路が延長され、舗装されたことである。道路即ち輸送力の増強が更にコーヒ栽培に拍車をかけたのであった。明日は此の道路を突っ走ることになっているが、熱い眼差しを向けて観察してみたい。

３月９日（月）

ゴロカと別離

０９・００にホテル出発となったが、原住民たちの露天商人は昨日の倍以上に店を広げ、我々相手に熱心に商いをしていた。コーヒ園に勤めるばかりでなく、現金収入を求めて年老いた男の人が商いに励み、此処では物物交換の姿はみられない。

従来、部落では現金は男性が握り、かつ自由に使用していた。冠婚葬祭にも男たちによって現金が集められ、女、子供にとつてはお金は無縁に近いものであった。しかしコーヒ栽培が始まると女性が畑やコーヒ工場で働き、現金が彼女たちの手に入った。今まで畑で働くことの稀であった男も、お金が女の自由になってはとコーヒ畑へも屢々出るらしく、ホテルの前の露天商も其の現象の一端かもしれない。

それまでは原住民はすべて自給自足の生活であり、現金視収入がなくとも彼等は千年二千年と続いてきた先祖代々からの生活は、維持することができたのである。

走り出したバスは、町のはずれにある異様な形の集会場の前で止まり、写真撮影をしてからトヨタ自動車修理工場の前を通ってコーヒ工場に案内された。コーヒ豆を選別して此れを煎り、製粉して袋ずめの作業は総て原住民の手で行われていた。東部高原地帯で生産されたコーヒの八割りは日本に輸出されているという。此の工場はオーストラリア人の経営するもので、道路の反対側に在る彼の豪華な邸宅は他を睥睨していた。

これから窮屈なマイクロバスに揺られながら、２００キロの行程を走破しなければならず、体力に一抹の不安を抱いてゴロカをさった。

高地の歴史

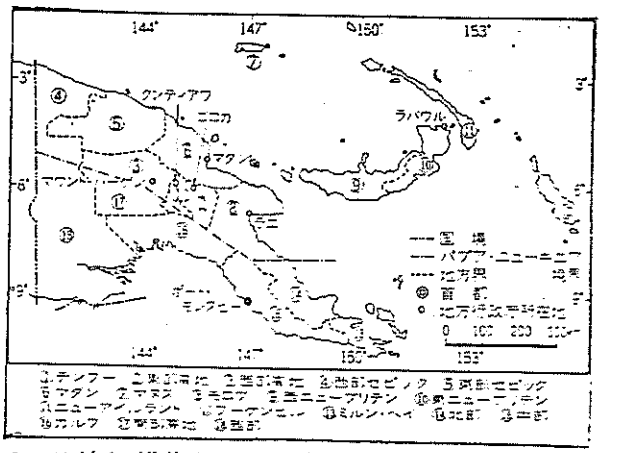
ニューギニアはヨーロッパ列強の植民地争奪の渦中に巻き込まれず、２０世紀まで忘れられていた国であった。ニューギニアの高地に人が住んでいることが知れたのは、１９３０年代といわれている。人種的にはアジア大陸から太平洋に押し出された最古の集団らしく、後から来た人種に高地に追いやられ、現在ニューギニア高地人として、他のメラネシア地域とは異なる人種集団を形成している。高地人たちは１万年間の年月、外部の世界に知られることなく厳しい大自然と対決し、人間の営みを続けてきたのであった。

１６世紀のヨーロッパ人の東南アジアへの進出は、図らずもニューギニア高地に食糧革命をもたらした。南米が起源とみられているサツマイモは、ヨーロッパ人或はマラヤ人の航海者により、今から３００～３５０年前にニューギニアへもたらされてのであった。

サツマイモは海岸から次第に奥地に入り高地で拡がった。今日ニューギニアのサツマイモは三百種以上の品種がみられるが、種はただ一つである。

サツマイモは高地人たちに歓迎された。根茎作物のタロイモやヤムイモのどれよりも容易に育成し、かつ単位面積の生産量も比較にならないほど多くとれるからだ。暦を持たない彼等は一年を通じて南北の間を動く太陽の位置によって、サツマイモ、タロイモの植え付けに最良の季節を定めている

又、豚祭り、冠婚葬祭、交易などは、近代化の時期に入っても部族社会では活発である。



ニューギニア高地は１９３３年、オーストラリア政府のジェームス・タイラの率いる探検隊によって、孤立したヴェールがはがされた。無人地帯或はそれに近い状態を想像していた探検隊が、三千米以上の連峰に囲まれた渓谷に入った時、その人口と二千五百米近い山の斜面に、整然と耕作されている焼畑耕作を見て、想像に絶した驚きだったという。これが高地における原住民とヨーロッパ人の最初の出会いであった。

１９５０年代の半ばまで高地人社会に目立った変化は起らなかった。ただ第二次大戦後白人が気候の良い高地にどしどし入ってきた。彼等の多くは一旗組でオーストラリアから無一文で出てきた連中である。オーストラリア行政は彼等に産業開発を奨励し、前記したようにコーヒの栽培耕作となったのである。

１９６０年に入ると、高地人社会では石斧はもはや実用に使用される事はなくなったが、なお伝統的な財貨としての価値は高く、交易にも使われていた。現在、外部との間に交通機関が利用できる所では、遂に石斧は消えている。

高地人にとっては、身体装飾は単なる容姿を端麗に見せるというのではなく、富を誇示することでもあり、評判を勝ち取ることでもあった。特に真珠の母貝、宝貝、子安貝、豚や犬の歯のネックレス、色鮮やかな鳥類の羽根、木のぼりカンガルーの毛皮が、価値がある交易の対象となった。これらの財産は個人の所有であり、家族ごとに保存されている。又これらの紛失、盗難を防ぐお呪いがあったが、今では南京錠前がかかっている。

高地の白人

パプアニューギニアの白人の人口は１９５０年頃から加速的に増加した。現在の総人口は３００余万と推定されているが、其のうち約５万人が非原住民といわれている。非原住民のうち白人は約４万で他は華僑やフィリッピン等のアジア人である。

パプアニューギニアに住む白人は三つの階層に分けられる。

先ず第二次大戦前あるいは大戦中からいる人々で、彼等は大戦中オーストラリア兵としてニューギニア戦線で日本軍と戦い、苦い経験を嘗めた人々である。戦後ニューギニアか

ら本国に帰還しても仕事がなく、多くの者がパプアニューギニアの行政の役人として、ある者は商売で一旗あげようとして残った。役人として残った彼等は高級を貰い、原住民の上にあぐらをかいて生活して来た。一旗組はどうか。原住民の労働者に対して賃金を払わなくともよい環境や、払っても信じ難い低賃金しか支払わず、行政当局の白人企業に対する協力もあって簡単に土地を手に入れ、文字通り一旗あげした人々であった。

次ぎにオーストラリア政府のパプアニューギニア経済開発の声明に合わせて一儲けしょうと、政府の事業援助と安い賃金のみに期待を掛けてやって来た新しい一旗組である。彼等は資本を持たずにやって来た。この種の人々は１９５０年以来、年々増加した。しかしやって来た年度によって彼等の事業や商売の成否を左右した。なぜならば原住民雇用の条件、つまり最低賃金の引き上げ、華僑との競争、先進国の大資本の進出が現われ出したからである。元来オーストラリアは後進国であったのである。

最後は移住者というよりも出稼ぎに来た人たちである。パプアニューギニアの自治、独立の声が高まるにつれて駈足で入って来た人達である。原住民の養成など英語を話せるというだけで就職に事欠かなかった。特にオーストラリア信託統治下では、原住民の土地はオーストラリア政府のみが買う事ができた。其の関係から白人の移住者たちは最良の土地を保有したのである。

時が流れ、土地が人口に比較して十分ある東部高地においても、厳しいものがあった。「白人にだまされた」「ビール一箱のため土地を取り上げられた」「白人からの借金の担保に取られたまま、白人のものになった」など、様々なことが聞かれたのである。

現金収入を得るようになり出した原住民が、白人の土地から上がってくる莫大な収益に対して反感を持ち始め、「借金は返す、ビールを返すから土地を返せ」「オーストラリアへ帰れ」などと叫び、白人に対して温順だった高地人の口から出て来たのである。

文盲率９０％以上を占める高地人たちが、経済の発展に伴って目覚めて来たことに注目して行きたい。（東部高地及び他の行政区域は前頁の地図参照）

豚の放し飼い

バスが西進して行くと、ゴロカの街を離れた所に町の墓地があった。カトリック式の墓地は整然と並び土葬である。墓地を過ぎた頃から道路上の至る所に黒豚の散歩している光景が眼に映ってきた。

豚たちは特に餌を与えられることはなく、夕方まで部落附近をぶらぶらして勝手に餌を捜し、豚も自給自足しなければならない。最も重要な豚の主食は、第一は人間の腸で消化

しきれなかったもの（人糞）。第二は人間が食べる時に捨てたイモやサトウキビの粕だ。あとは野草の根などを掘ったりして暮らしており、道路上の散歩は草の根捜しである。

あらゆる畑には木の杭を打ち込んで厳重な囲いがしてあるが、これは盗難よけではなく、豚にイモを食べられない為である。イモは大事な人間の主食だ。

こういう次第だから、部落に便所という設備が一切なくとも、常に豚が清掃してくれる。気の早い豚は用たしの最中から待ち構え、二、三頭も集まると先を争って喧嘩が始まる。喧嘩になれば物理的に体重の重い豚が強く弱者が出るのは当然で、余り食事にありつけない豚は痩せこけている。中国の飼育と全く同じだ。

パプアニューギニアの人を「豚の民族」と呼ぶくらい豚は貴重な財産である。動物性蛋白が豚にしか望めないなら、どしどし増産すればよい。しかし、このような食糧事情では大量に放し飼いしても、痩せ豚ばかりで其のうえ多産系ではないようだ。

夕方になると主婦たちは、自分の豚が無事に家に帰ったか責任をもって調べ、薄暗くなっても帰らない豚は、ひっかかえて連れ戻さなければならず、女性が責任者である。勿論日本人が考えるような大きい豚はおらず小さなものばかりだ。

親豚の乳房にありつけず、あぶれた子豚や、未だ乳離れしない子豚の親が死んだりすると、主婦は我が子と同じように子豚に乳房をふくませると云うから、文明社会では想像も出来ない石器時代のようだ。

裁判問題も豚が関係している事件が多く、他人の畑のイモを猛烈な鼻の力で掘り上げて食べるからである。また豚の所有者の目印として尻尾を切断するとか、或は耳に傷を付けたりして所有者を明確にしているという。豚に関連して土地問題に一言述べてみると、各部落の土地は祖先伝来のもので、特別に政府が云々するのではなく、至って自然に土地の所有権が確立している。

ハイウェイ光景

舗装道路をバスは驀進した。東部高地一帯にコーヒ園やトウモロコシ畑が開かれ、高地経済はゴロカから西へと発展している状況が窺えた。

何処でも豚はお眼にかかれたが、羊や山羊は見られない。草原がないからだと運転手兼ガイドは説明していたが、それよりも気候の問題ではないだろうか。

貴重な財産とはいえ、あれほどいる豚は食用にされる事は滅多になく、猪や有袋動物、鳥類から蛋白質を摂取しているそうで、もう少し食料文化にも力を注ぐべきである。

右手に蒙古のパオの格好をしたカヤ葺の家が数軒あり、始めて見た実に珍しい存在であ

つた。部族が変われば言語ばかりでなく建築様式までも一変し、集村でなく散村の形式をとっている。原住民の村人たちは農作業に出掛け、全戸に南京錠がかけられて内部を見ることが出来ず残念であった。地図から判読すると此処はチンブ県のシナシナ郡、海抜１、５００～２、０００メートル地点のようで、道路建設の大恩恵を受けており、高地の中でも早くからヨーロッパ人との接触があったような感じがした。

此の村を過ぎて暫く走ると、カトマンズ目玉寺そっくりのカヤ葺の一軒家があった。仏教に全く無縁の此の地にしては奇妙な建物だ。多分酋長の家か、それとも精霊信仰の家屋のような気がして、ハイウェイの光景に魅了され通しであった。

出発して一時間余を経過すると標高２、３００米の峠が遠望できた。しかし標高４、６９４米の東ニューギニア最高峰ウィルヘルム山や、その手前のダウロ山を眺望することは叶わず、地形上無理な話である。

峠の近くの道路脇に、ちょろちょろと流れ出ている泉から水を汲む少年が見えた。往来の少ないハイウェイでは小さな変化も大変化である。山岳民族の彼等は乏しい水の確保に懸命で、水汲みは子供達の仕事かも知れない。

部落は部族ごと或は其の分部族に別れ、丘陵の尾根に沿って作られている。どの家族も畑は住居からかなり離れた所にあり、畑には小屋の役目をした小さな建物が建っていた。

頭の上に乗せる花輪を売っている老人や子供が、所々でたまに通る車を待っている光景は長閑である。彼等の期待に応えてバスは停車し、一行も買い求めて車の中は花が咲いたように美男美女と化した。おしゃべりには余り中味はないが車内は一段と騒然となり、これから先の旅の楽しさに期待を掛けているようであった。（下は花売り）

コーヒ豆を入れた袋も道路ばたに集積して集荷の車を待っていた。山間僻地の舗装された沿道は秘境という感じは全くなく、稜線上の数珠状に家の並んだ集落だけが、少しばかり原始生活を匂わすだけである。

１０・３０頃、標高２、３００米の峠に辿り着き、眺めた下界は「尺山寸水」と表現するか、インカの国を想起させていた。旅行前に読んだガイドブックによると、マウント・ハーゲンまでの道路の舗装は半分程度と書かれていたが、現在は全線舗装され病上がりの私には何よりの贈り物であった。

突然、道路一杯に弓矢を持った群衆が、切歯扼腕した姿で待ち受け、人食い人種に遭遇したのかと、肝脳地に塗ったのであった。

部族間の殺人事件

自動車は停止を命ぜられた。殺気立った異様な雰囲気である。何事であろうか。

部族の総員が手に汗を握り、匹夫の勇を振りしぼって弓矢を持った姿に遭遇した時、現在でも霊長類の世界に、原始時代のような闘争があるのだろうかと、恐怖の眼で注目した。

運転手の話によると、一週間前に隣り部族との間で闘争が起り、相手部族の一人が殺され、その逆襲に備えて厳重な警戒態勢を敷いているとの事だった。

彼等は我々に危害を加える意志はなく、ただ此処から先の道中が危険だからと停止を命じたのである。これを知った我々は、薄氷を履むような状態から安堵の胸を撫で下ろした。

彼等同士の争いは、たいてい「豚と女」に原因があるらしい。犯罪の陰には女ありだ。日本軍が人食人種に襲われたという戦記に、兵隊の一人が女性の腰ミノを上げて覗いたことに、彼等の蓄積した怒りが爆発したと書かれていた。

地上最後の秘境などと呼ばれて来たニューギニアに、地球最後の人食人種が今でも存在するのだろうか。（上は弓矢を持って警戒する部族の人たち。女も弓矢を持っている）

人食人種という言葉には、人さえ見れば殺して食う人種のイメージが強い。しかし人食いの目的は食うこと自体よりも、敵を侮辱するする事にあるようだ。

彼等は自分たちの部落、自分たちの種族に対する誇りは極めて強い。高地パプア人は誇り高い民族である。其の誇り高い連中が険しい山や谷をへだてて群雄割拠しているから、高地の民族は戦国時代のように、何時でも何処かで闘争をやっているのだ。

このような静寂な地に凄惨な戦いが起り、群衆は鬼魔の群れとなって弓矢が唸り出し、肉弾相打つことだけは速やかに絶滅しなければならない。

文明が次第にパプアニューギニアに浸透して来た今日、誰しも見ることのできない血を以て血を洗う闘争の局面を直視した我々は、千載一遇の僥倖であり奇遇であったが、彼等にとっては実に気の毒な不祥事件に相違ない。

時間が経つにつれて立場が逆転し、反対に彼等が一行を物めずらし顔で眺め出した。早速バスを降りて武装集団の中に飛び込み、記念の写真を撮らして貰つた。其の御礼の印とは大袈裟だがタバコを進呈し、約３０分後に発車したのであった。

墓と葬式

峠を越えると集落の数も少なくなり、何をするという事もなく道路端で休んでいる老若男女の姿が散見された。

彼等の世界は時間を気にする世界ではなく、何千年この方、ヴェールに包まれたままで自給自足で生きてきた。彼等の生活の中で時間がどれほど意味を持つのだろうか。彼等は「時間は無限にあるもの」としている。一日一回だけの食事というから、体力の消耗をしないために道路端で寝転んでいるのかも知れない。日本人は本当に忙しい人種だ。

突然バスは停車した。高く積んだ大きな土盛りの横に一人の老人が佇んでいる。運転手は、老人の夫人が死亡して其の墓守りをしているのだと説明した。本当に冥土への道には王はないのである。

写真撮影を希望する人は、お賽銭を上げてからシャツターを切ってくれと云われ、早速小銭を提供した。何という死後まで続く夫婦愛の姿であろうか、それとも現金収入の為であろうか。何れにしても当てのない客を待つ身は時間の観念がないようであった。

高地パプアの人も風葬（木の股の所に祠を作り死骸を入れる）かと思っていたが、種族が違えば風習も異なり此処では土葬である。キリスト教の影響が及んでいるのかも知れない。元来、高地パプアには宗教というほどのものはなく、いろんなものに霊魂があると考えていた。太陽、月、山、水、虹等には霊魂があり、星には霊魂はないそうである。

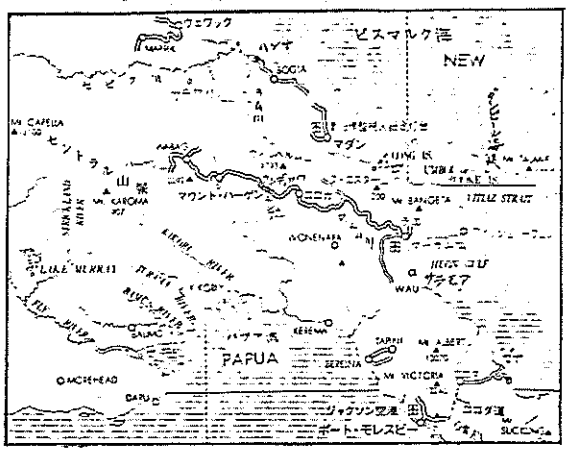
特定の場所にも霊魂がある。橋が落下して人が死ぬと川の精霊に見込まれたと思い、人の死や病気は死者の精霊が災厄をもたらしたと考えている。だから病気になると豚を殺して精霊を和らげたり、敵に殺された者の精霊を慰めるために果てしない復讐戦を続けるのである。また自然の物の精霊に対しては宝貝や網袋などを供え、呪文もあるという。

葬式の風習も珍しいようだ。一般には矢を射って豚を殺し、死んだ豚の上に火をのせて毛が焦げると竹ナイフで表皮を剥ぎ取る。白い真皮が出てくると更に火に掛けて黒くなるまで焼く。焼け上がった豚はバナナの葉を敷きつめた上に並べ、解体して内臓を取り出すのである。死んだ子の父親は解体に参加しないという。

隣り部落の実力者らしい男が泣きながら一団の男達を先導して来る。儀礼的な泣き役だ。死んだ子の父母は此れにつられて又泣きだして葬儀が始まる。父親も母親も体中に泥を塗るのは哀悼の意を表わすもので、高地では広く共通した習慣らしい。

焼かれた豚はすべて解体して料理され、準備が終わると全員で食い始め、残った物は持ち帰るそうである。豚は冠婚葬祭用だ。

チンブの町



昼食は県庁所在地のチンブ市のレストランでとることになった。「シンブ」とオーストラリア行政以前の呼称に改名されたが、長い間の習慣で一般にチンブと呼んでいる。

自治政府の誕生前のチンブ人達にとってはゴロカが都であり、ハウス・ボーイや日雇い人夫の仕事があると聞いて、若者達は憧れてゴロカに行った。

高地に換金作物のコーヒや茶が導入されて以来、経済成長が急速に進み、政府は人口密度の割合に高いマウント・ハーゲン、チンブ、ゴロカ地方を重点地区として重視した。

一方、第二次大戦後までは高地を結ぶ国道はなかったが、１９５０年に漸くゴロカとチンブ地方をつなぐ国道が開通した。当初はトラック一台がやっと通れる幅しかなく、勿論舗装はされていなかった。道路の開通はチンブの発展に寄与し、現在では人口２０００という高地の大都会となった。市の中心部には市役所があり、屋根に三角窓のついた自動車の大修理工場が建っていた。

食後、一人で街を散策した。活気が溢れた街並みに点々と商店があり、その一軒を覗いて初めて極楽鳥の美麗な羽根を見た。見惚れて食指が動くのは当然のことで、早速、７キナを支払って手に入れた。チンブ以後の所では随分と高い値段が付いていたが、格安で入手できたのは僥倖であった。

レストランの売店に瓢箪が吊るされていた。瓢箪愛好家の私にとっては良い記念だと買ったものの、２キナと言われてびっくりであった。物価が高いとは聞いていたが日本よりも高く、それほどパプアでは珍重品なのだろうか。我々には此の店で飼育している鳥の方が、余程パプアの珍重品である。

「キナ」とはパプアニューギニアの通貨の単位で、真珠の母貝を三日月形に切った首飾りという意味である。

ミンテーマ村の見学

バスはアサロ渓谷に下って行った。小さな村の門には獣類の顎や頭の骨が幾十となく飾られ、数十人の村人達は原始時代の正装で一行を歓迎した。これから始まる彼等の演出を

見学する為の丸太を削った腰掛までも用意され、さすがに観光なれしたところが多分に見受けられた。（右は出迎えた人の一部）

「蜂の巣狩り」

先ず最初の催しは蜂の巣狩りである。男達は頭の上に色鮮やかな鳥の羽根を刺し、上半身は裸で下半身は前垂れで隠し、全員葉の付いた木の枝を持っている。

木の葉で作った見せ掛けの蜂の巣に向い一斉に大声を上げては突進し、突進しては逃げ、木の枝を振り上げては蜂の巣の襲撃を数回繰り返した。最後に巣を棒の鈎で引っ張って終わりである。何しろ丸裸であるから蜂に刺される事は覚悟の上だろうが、どうして煙攻めにしないのか疑問だ。実戦では多分煙りで包囲するのかも知れない。煙攻めや火攻めをしても、ジャングルは湿度が高く苔が生えているから山火事の心配はないはずだ。昔の日本では蜂の幼虫は食用にしたが、彼等は巣ごと全部を食べるらしい。

「盗人狩り」

次ぎの演出は盗人狩りだ。バナナの葉を巻き付けた高さ三米ほどの木を一本立て、此れをバナナの木と仮想して演技するのである。

彼等全員が部落の陰に隠れている中を、一人の盗人役になった男が、用心深く四方を眺めてバナナの木に近寄り、一瞬のうちに木に登った。間髪を入れず全員が大声をあげて盗人を包囲し、棒で殴り殺すというストリーだ。犯人は地上に倒れ、全身を震わせ痙攣を起して死んで行く動作など、演出は満点である。

「火おこし」

続いて火おこしの実演である。彼等はマッチは勿論、火打石やレンズもなく、方法はただ一つ。細く割った竹の棒を擦るだけだ。

先ず地面に木の皮や枯葉を置く。その上に３０センチ前後の棒を置いて両端を両足で踏む。この棒は一方を真中で割ってクサビがさしてある。クサビは木でも石でもよい。木にしても決まったものでなく、良く乾燥していればよい。次に踏み付けた棒の下へ割った竹のヒゴを通して、両端を両手で持つ。以上で準備は完了だ。

あとは竹ヒゴを交互に引っ張って強く擦れば、１０秒足らずで煙りが出て、棒の下のタキツケが煙りを上げて燃え出すのである。火おこしに就いては私もビルマで体験し、物珍しい事ではないが、原始民族の発火器は我々が想像するほど不便なものではない。

「シングシング　と　ピジン・イングリッシュ」

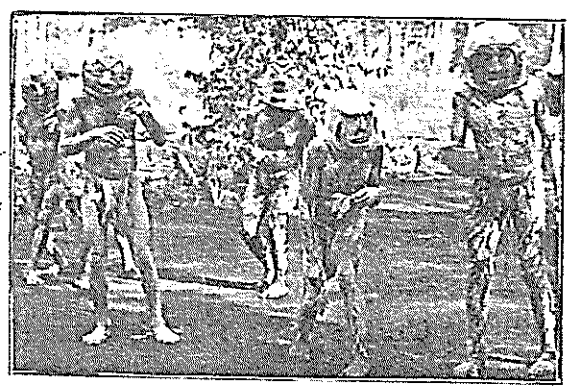
最後に口舌の争いから始まる戦争ごっこのような真似をして見せた。高地パプア人は農耕民族で石器時代が未だ残っている。しかも彼等にとって最も波乱に富む時は、彼等同士の戦争だと言うのであろうか。其の演出をしたのである。戦時中の日本軍が敗走中、原住民に襲われた事を考えると、彼等は本当に好戦的な民族かもしれない。

其の後、女を交えた全員が踊り出した。シングシングである。ピジン・イングリッシュに「シングシング」という言葉がある。これは単なる踊りといふ意味ではない。彼等の踊りは娯楽の為ばかりでなく、儀礼の為にあるのだ。友情の交換とか連帯感を強めるために、儀礼以外にもシングシングを行うということであるらしい。日本の村の鎮守の祭に太鼓を鳴らし、祭気分をあふるようなもので、我々に対して歓迎の儀礼であつたょうだ。

一行が帰りかけた時に日本軍の軍帽を被った老人が現われた。意外な光景だが日本軍と何かの関係があったのだろうか。誠に皮肉な思いがしたのであった。

「ピジン・イングリッシュ」とは辞典に俗称「シナ英語」と訳してある。いろいろな言語を使う異種の人々の混住地に生まれた共通語で、華僑がニューギニアに渡来して商売の為に普及したしたものである。現在もニューギニア全島で使用されている。

泥人間（マッドメン）のおどり



晴耕雨読よりも、もっと自由な生活をしている彼等と別れ、少し離れた隣り部落に案内された。ワールド航空が宣伝している秘境アサロ渓谷の泥人間の踊りの場所である。前の部落と同じく部落の門は獣骨で一杯だ。

男女を問わず全身を泥で塗りつぶし、其のうえ男は泥で造ったお面をかぶり、文字通りの「鬼面人を嚇す」という状態を表わしていた（上の写真は踊りの一場面）。石川県奥能登地方の御陣乗太鼓に優るとも劣らない迫力で、これこそ石器時代に逆戻りした感がした。

首狩りというのか、人食いの祭というのか、踊りの意味は前の村と同じだ。重いお面を被った緩慢な動作ながら、旗鼓相当たる場面を幾回となく繰り返していた。キリスト教の宣教師がパプア人を人間と見ていなかったらしいが、将に此の姿であったのかも知れない。

大きな泥の面をかぶり、弓に矢をつがえて射ってみせたが、木の楯に不気味に突き刺さった。当たれば相当な威力があるだろうが、羽根を附けていない矢は直進せず、命中率は至って悪い。ただ芦の枯れ茎で作ったが矢が、あれほど威力があるとは想像もできない。

豚や女が原因で戦闘が始まり、味方が殺された数と同数の敵を殺すまで、停戦しないで頑張るというが、どのような戦闘状態を呈するのだろうか。ゲリラ戦法か、それとも源平合戦のように両軍が横隊に並び、一人が前に出て敵を罵り、悪口合戦に続いて矢の合戦に移るのだろうか。あの弓矢ではバタバタ倒れるほど命中はしない。（右は敵を殺す場面）

彼等の戦闘は決して皆殺しの戦闘ではない。又できないだろう。夕暮れになると見えないから自然休戦に移らなければならない。確かに死者は出るが文明国のような残酷な戦闘にまで発展しない。彼等の間では人が死ぬと、日ごろ仲の良くない部落の誰かが魔術で殺したと、直ぐ戦争を始めるというから、戦争は彼等のスポーツかも知れない。戦争から生まれた知恵が泥人間を考案したのである。

マウント・ハーゲン

アサロ渓谷の圧巻の場面と別れてマウント・ハーゲンに向かったが、一行は疲労のために睡魔に襲われいた。ハーゲンに近ずくにつれて平坦地が拡がって大盆地を形成し、立派な警察官舎や刑務所の白い建物が際立って見えていた。未開の国では警察は絶対的な権力だと、豪華な建物までが威圧感を誇示していた。コーヒ園や茶畑、トウモロコシ畑の耕作も眼につき、自動車の姿も時々見受けられるようになったが、一本の幹線道路の完成が西部高原を潤していた。水力発電は日本の援助によって建設されたと聞き、以心伝心、日本との友好関係を一段と深めたいものである。

１６・３０、街の外れにあるハイランダーホテルに、杞憂したほどもなく無事に着き愁眉をひらいた。マウント・ハーゲンはゴロカよりも標高は高く、気候は非常に凌ぎよい所である。街の中央にある植物園のニューギニア・シャクナゲは有名で、極楽鳥の飛んでいるバイヤ・リバーバレ鳥類保護園とともに、一見に値するとガイドブックに載っていた。早速、現地の人に案内を依頼して回ってみたが、閉園時間となって残念ながら見学できずに引き上げた。「楽しんで淫せず」即ち楽しみも度を過してはしてはならないと、自戒したのであった。

平屋建の此のホテルも亦「間然するなし」と表現すべきか、非難する所はなかったが、初めて虫の夜襲に遭遇しスプレーと蚊取線香の威力で撃退した想い出は懐かしい。

3月10日（火）

チャーター機

幽静な朝に響く虫の声に眼を覚ました。充分な休養は爽快な気分を取り戻し、本日は石器時代の面影を其のまま残す、地上最後の秘境への旅である。

０８・３０、我々一行に金髪の若い白人女性が一人加わり、ホテルを発って飛行場に向かった。チャーター機専用の小さな飛行場に約十機が翼を休め、一部は奥地の急患輸送の役割を果たしているのかも知れない。チャーター機は重量の制限が厳しく、許可されるものは手荷物一個だけで、当然ながらトランクはホテルに残置したのであった。

我々の目指すカラワリ川は、ニューギニアの大河セピック河の下流に近い一支流であり、セピック河下流一帯は大湿地帯を形成している。

安達第十八軍（二十師団、四十一師団、五十一師団）はニューギニア東部戦線を離脱して、１９年の初めに河口のウエワク（１３頁地図参照）に集結した。ホーランジァ（地図のジャヤプーラ）に上陸した連合軍に対する攻撃命令を受領した第十八軍は、軍需物資の不足と疲労困憊の兵力を以ってアイタペへと前進した。然し乍ら敵の堅固な陣地に阻まれて反撃を受け、原始生活をしいられながら前門に虎、後門に狼を迎え、水火を踏むような死闘を続けて終戦となった悲劇の跡である。二十人乗りのプロペラ機の最前列に席を取ったことも、暴虎馮河の地を瞰下したい一心からであった。

０９・００、プロペラは始動して快晴に恵まれたフライトである。ハーゲン地方までは開発が進行し、小区画ながら畑の耕作地が見えていたが、直ぐジャングルの世界に飛び込んでしまった。高度１、６００メートルの水平飛行に移ると、密林の中に一条の白煙が私の網膜を強く刺激して、ビルマのジャングル戦を想起させた。

ビスマルク山脈の限りなく続く原始林の中に、祖先伝来の数千年前からのものだろうが、曲がりくねった一本の細い山道が延びていた。偉大な人間の生命力は前人未踏の奥の奥地にまでも存在している証拠である。

フライト３０分、１００万分の１の地図を拡げて、操縦手に現在の位置の確認を求めたところ、彼は図上に鉛筆で記入してくれた。カラワリ川西方にあるラバラマ山（７８５８フィート）附近である。分水嶺から流れる河川は北の太平洋へと流れている光景が明瞭に確認され、このコースの操縦はベテランのパイロットでなければ危険らしく、想い出に残る記念にと操縦桿を握る彼にレンズを向けた。

湖沼や湿地、蛇行する河川が眼下に展開し始めた時に再び位置の確認を求め、セピック

河本流近くのマンドゥク上空と知り、カラワリ近しと胸を踊らせたのである。

カラワリは別に大集落が存在するのではなく、川の流域一帯の総称であろう。知らずの間にチャーター機は長さ２００米ほどの草原に着陸した。飛行場というよりも河原の平地地に過ぎず、極く簡単に着陸したのは驚きであった。矢張りベテランのパイロットである

一行が機から降りると帰りの便を利用する白人客が待ち受け、裸に裸足の現地人が荷物の積卸し作業を始めた。チャーター機はロッジの食糧その他の輸送兼用機であったのだ。

殺風景な河原は赤い泥土のぬかるみで、桃源境に足を踏み込んだ感じは未だ湧かず、何もない「無何有の郷」に過ぎなかった。

カラワリ・ロッジ

飛行場の横を流れるカラワリ川は黄河のような黄土の流れであった。川岸に数隻のカヌーが繋留屋れ、我々はヤマハ発動機を着けた小型鉄製カヌーに乗船した。旧陸軍の上陸用舟艇に似たモータボートである。

セピック河本流に近い性か川幅は１００米以上もあり、緩やかな流れの面を水飛沫を飛ばして滑るように走った。航行すること約２０分、荒れ果てた一軒の小屋の建っている対岸に上陸した。

寂しい所に人の来訪を待つ喜びというか、空谷の足音と形容するか、眼を疑うほどに飾った原住民たちは、鼓歌を吹き鳴らしての大歓迎であった。（上は大歓迎の光景）

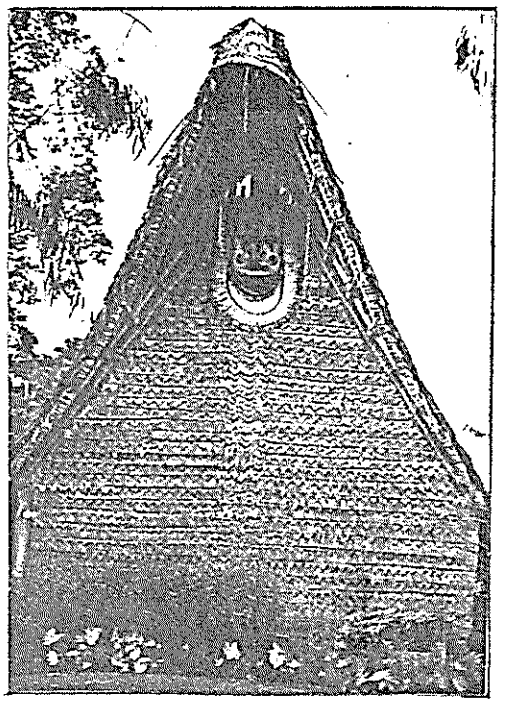
顔から足の先まで白い泥で厚化粧を施し、男も女も全身に最大の飾りを着け、輪を描いて踊る光景を飛耳長目して眺めた。遂に私も其の一団の中に加わり、華彩な珍鳥の羽根で覆った酋長の冠を拝借し、記念の撮影をしたのである。

山中に暦日なしと時間の経過も忘れて見惚れていたが、親愛の情を表わした彼等の瞳に送られながら、漸くトラックに乗車した。

ど肝を抜くような歓迎に圧倒された興奮は仲々覚めず、急斜面の坂道をポンコツ・トラックは唸りながら登ったところ、稜線の上に三角屋根の奇妙な建物が建っていた。一目して精霊の家の構えだと判り、カラワリに来て始めてニューギニアの魅力を味わったような気がしたのである。（次頁の写真は精霊の家に似たカラワリ・ロッジの正面）

尾根づたいに建っているロッジは木の葉で屋根を葺き、アンペラと板とで囲んだ高床

の建物が十棟ばかりあり、各棟は廊下を隔てて二室に分かれている。室内は蚊張を吊るした寝台にの他、シャワー、トイレから洗面所に三点セットも備わり、一応の条件は満たされている。内陸の孤島のような奥地に良く是れだけのものをと、感心させられたのである。



仙人の棲家の感じがするロッジに惚れ込んで掘立の廊下を歩くと、現地の蕃族が作った独特の彫刻が飾られ、将に無双の山荘と称賛したい。

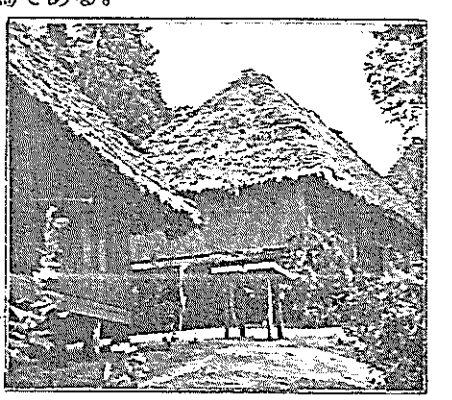
部屋から北の方を眺めると、緑に覆われたジャングルの水平線が悠遠に続き、幽境の世界が展開していた。此の果てしなく延びる果ての地が、安達第十八軍将兵の白骨となって戦ったセピックの戦場だ。当初の十五万の兵力が生存者わずかに一万という、他に例のない死闘だったのである。

ポートモレスビーから東部高地（ゴロカ）～西部高地（マウント・ハーゲン）へと旅を続けて、漸く東部セピック（１９頁行政区画図参照）のカラワリに辿り着き、地上最後の秘境の生活が第一歩を踏み出したのであった。

鍋底のような黒い肌の原住民は、鳥の雌雄が判らないのと同じく顔だけでは男女の区別はできない。そして文明の匂いのするものは一かけらもない。数千年来の原始生活をする彼等は聖者の使いのようで、楽天主義の奇妙な集団の感じがする。又、礼儀は正しく社交性に富み、家族的な温かさを直感的に肌に伝わってきた。これが密林生活者と接触した第一印象だ。我々の心の中に描いていた処女地の夢に、花を咲かす時が来たのである。

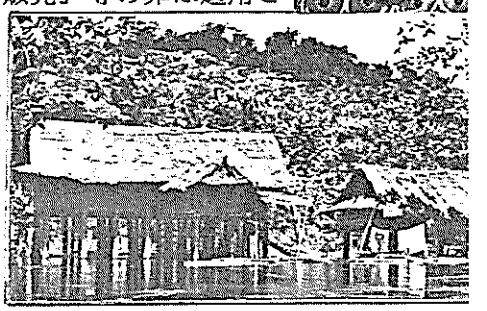
微笑で迎えてくれた中年のオーストラリア人夫婦は此処の支配人である。早速、持参してきた東海道五十三次の絵を贈って親善の挨拶を交わした。今日まで続けて来た海外旅行時の私の習慣であり、自分自身の旅の印象を深くする為である。

支配人夫婦は一旗組だろうか。それはどうでもよい。パプアニューギニアは独立したとはいえ未だ建国十二年に過ぎず、苦難の道程は甚だ遠いのである。支配人達が少しでも原始社会の開発の為に貢献して貰いたいのである。（右はロッジの客室）



イーマス村の神に感謝の踊り

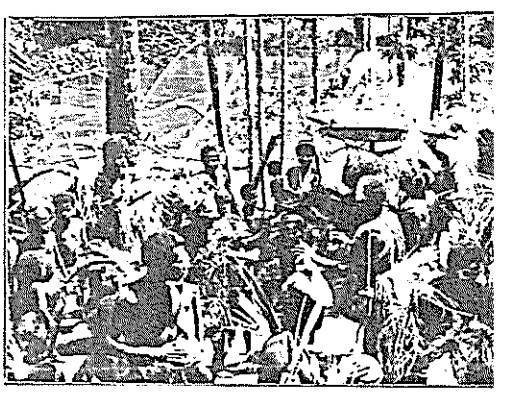
ロッジのロビーは食堂兼踊り場と御土産品の展示即売所になっている。ゴロカからマウント・ハーゲンまでの高地では、主として極楽鳥などの羽根や動物の牙などの民芸品が多く、カラワリに来て初めてニューギニアらしい木製の民芸品にお眼にかかった。噂で聞いていた瓢箪製のペニスサックや、男性自身を誇大に彫刻した人間像は初対面で、漁色家は喜ぶであろう。裸同然の原住民には刑法の「わいせつ物陳列、販売」等の罪は適用されるはずもない。（右上は民芸品売場の精霊の面）



食事を含めて二時間の休憩の後、１３・３０、二隻のカヌーに分乗してカラワリ川周辺の部落の見学へとエンジンが始動した。風ひとつなく鏡のような水面を追い越し追い越されつつ遡上した。カラワリ川支流のアラフォンニ川に入ると川幅は狭くなり、水際に高床式の建物が建っている景観は至って長閑である。約３０分ほど航行して右岸にあるイーマス村に到着した。（右上は水際の高床式の建物）（下は神事の踊り）

数時間も前から歓迎の準備をしていたのだろうか、４、５０人の原住民の人たちは小さな子供も含めて各人各様、儀式用のメーキャップをし、我々の来訪を待ち構えていた。

泥だらけの岸辺を跨いで３０米ほどの所に数軒のカヤ葺が建ち、其の狭い広場で神事の踊りが始まった。１メートルばかりの模型の魚の上に鳥の羽を突き刺し、これを棒の上に乗せて高く差し上げ、この男を中心にして老若男女が輪をえがいて踊るのであった。男は前垂れ、女は子供まで腰ミノを着けた裸同然の姿で、太鼓に調子を合わせて鼓歌を叫んでいた。熱帯の炎暑の盛りに汗をかきながらの踊りは、本当にご苦労なことだ。いくらの現金収入になるのか知らないが、我々の為にと思うと感謝しなければならない。



魚と鳥は彼等の唯一の蛋白源であり、平素から恩恵を受けている魚や鳥に感謝して、神にお祈りを捧げる神事である。精霊信仰しかない彼等に厳粛さを感じたばかりか、現在の文明社会に生きる人の中で、どれだけ自然に対して感謝の気持があるのか、反省させられたのであった。

年老いた酋長は真っ黒な肌をして木の株に腰掛けていた。６１歳という彼は流石に貫禄が備わり

真珠の母貝や宝貝の首飾りは見事だ。「老いたる馬は道を忘れず」というか、数々の経験をもった酋長は総指揮官であり、酋長だけが鼻の飾りが許されている。（右は昼間の酋長の姿）

我々と比較して年の割りには老け込んでいるのは栄養の問題か、それとも一夫多妻の疲れの性だろうか。文献によると平均寿命は４７歳だから勿論長命である。肌の色の黒さもまた年齢に比例している。ススと豚の油とこね混ぜて作った墨を全身に塗るというから、黒く輝く肌の色は長老を表わしている。マジックインクを持ってくればと悔やんだが、後の祭りであった。

踊りの合間に建物の内部を覗いてみた。明かり窓もない高床式の家は床も壁も竹で作り、すっからかんの住居は南方民族は何処も同じである。弓矢のほかに若干の容器と蚊張に網袋しかなく、裸のままごろりと横になるだけの生活だ。大きな財産といえば貝や歯の首飾りにカヌーぐらいだろう。

我々にとっては汚くて足を踏み込めない屋内には、文明の影響の影は全く見当らなかったが、彼等にとっては住めば都である。

エンボインの役所と学校

天真爛漫なイーマス村を去って川を下り、右岸に降りて広い高台に案内されたが、丘は川岸より相当の距離にあり、重い足を曳きずりながら登った。丘の頂には数本のトーテンポールが立っていて、その奥に珍しく二階建のカヤ葺の家屋があった。

表の立看板には、東部セピック州（１９頁の要図参照）のＳＵＢ地方の事務所と記載されていて、エンボインは此の地の地名であるようだ。日本で言うと郡市の役所だろう。

屋外階段を昇ると二階が事務所となつており、一人の役人しかいない寂しい役所に過ぎない。事務所の正面に赤地には極楽鳥を染め抜いた国旗と、青地に精霊の家・魚・ワニ・カヌー・太鼓を描いた州旗が掲げてあった。国家意識を高揚す為にも郷土を愛すという為にも良いことである。

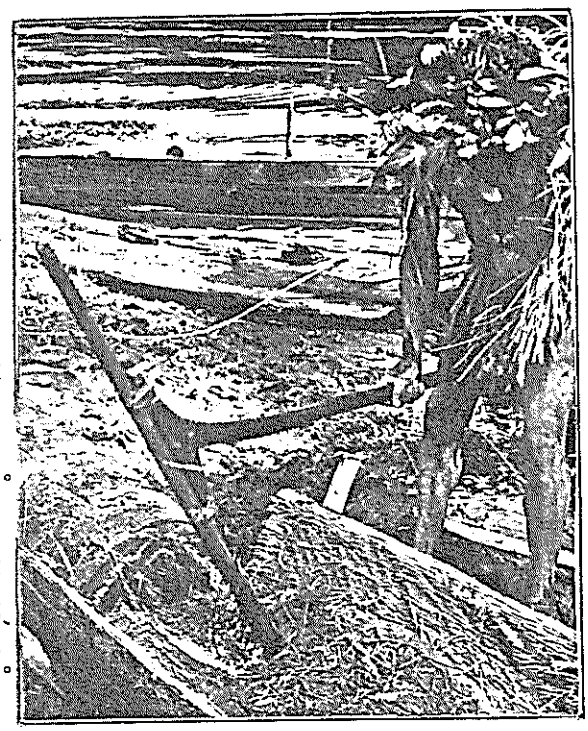
二階の玄関の所に一個のポストが備え付けてあったが、果たして郵便制度が普及しているのだろうか。電話施設は勿論ある訳がなく、文盲の世界には不思議な存在であり、利用されているのかは分からない。役所間の通信連絡用ではないだろうか。

役所の下の方に窓にガラスもない小さなカヤ葺が一軒建っていた。あれが小学校だと説明を受けたが先生も生徒も見当らず、エンボインは役所と学校の二棟だけの丘であった。

第二次大戦後アジア、アフリカを覆った植民地運動は、静かにパプアニューギニアを訪れて１９７５年３月６日に独立をもたらした。此の内陸奥地の秘境に貧弱ながらも地方自治体が発足し、国家の事業として教育の第一歩を踏み出していたことは予想外の事で、心から敬意を表したい。

世界の文明から取り残され国家の意味さえ知らなかった環境の中で、数千年前からの自給自足の生活は一朝にしては向上は望めないものの、緩慢ながらも発展を期待して丘を降りたのであった。

クンディメン村のパン作り



再びカヌーは遡上して僅か五、六軒しかない小さな部落のクンディメンを訪れた。此処でのパン作りの見学は彼等の日常生活を知る上において興味津々であった。

直径３０センチほどもある大木を、右の写真のように堅木で作った鶴嘴で掘り起こし、木の髄から繊維を取るのが最初の仕事である。これは体力が要るから男の仕事だが、繊維は割合簡単にぽこぽこと取れていた。パンの木の実があれば此の様な面倒なことはしないが、パンの木は無尽蔵ではなく限りがあるからだ。見学した木は多分サゴヤシの幹だろう。澱粉質に富んでいるから日本軍も食用にしていた事を思い出していた。

太さ２ミリほどの薄赤色の繊維を竹で編んだザルの中に入れ、汚い川の水を杓（瓢箪製）で汲んでは何回となく上から注ぐと、不思議なことに白い汁が流れ出た。澱粉の色である。白い汁を溜る壺や瓶がないから小型のカヌーに流し込み、舟の底に沈殿した澱粉を取りだして、フライパンのような平たい鍋で焼くとパンの出来上りだ。これらは女の仕事である。

試食してみると少しは甘味はあったが、贅沢に慣れた我々の口には美味しいくはない。しかし彼等にとっては貴重な主食であり、必要から生まれた発明である。

敗走して高地の奥に逃げ込んだ日本軍は、前記したパンの実やココヤシばかりでなく、草の根からも澱粉質を取って暮らしたという記事があったが、偉大な生命力に驚くばかりで、窮すれば通ずるのであろう。

こうして見学して見ると、石器時代の影を残す原始生活は、我々が考えるほど不便ではないような感じさえ受けるのであった。

ココヤシの繊維を利用した他の一つの方法は、繊維の汁に塩水を入れ、直接それを熱湯の中に注ぐと瞬間的にゼリー状に凝固するのである。丁度日本のカタクリ粉のようで少々の甘味もあり、我々でも十分食用にすることができる。（右の写真）

塩造りは、ヤシの実の殻の中へ泥状の土を入れ、上から何回となく川の水を注ぐと、殻の下の小さい穴からぽつりぽつりと水が落ちてくる。此の水に塩分が含まれているというから、原始文化は素晴らしい。中国大陸やビルマには岩塩がとれ、地球が凝固した時の天の恵である。多分此の土にも多少の塩分が含まれているのであろう。

海岸線から遠く内陸に入った奥地まで交易品として塩は流通してしておらず、今後カラワリを訪れる日本人は、御土産品として塩を持参するように提案しておきたい。

次ぎに見学した料理は、闊葉樹の葉を其のまま入れた鍋の中に、川で取ってきたナマズを入れて一緒に煮たものであった。これは副食だろう。野菜の替わりに今日は木の葉を代用品を使い、木の葉も食べられるのだと教えているようである。普通は野草とかサツマイモの葉、ワラビ、ゼンマイ、若い瓢箪の実等を食べるのではないだろうか。

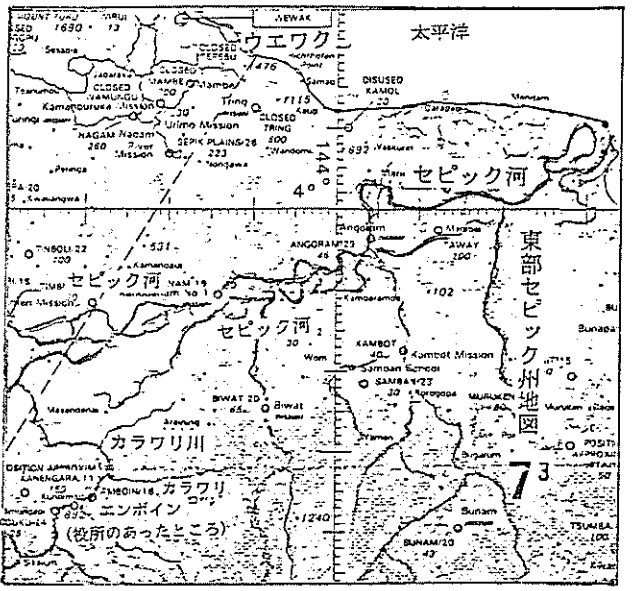
料理に必要な鉄の包丁という文明の利器はなく、竹ナイフか石斧を使っている。上記のナマズの料理も竹ナイフで切り込みを入れ、手で二つに折って鍋に入れていたが、石器時代の面影が未だ残されていたのである。

彼等は一家揃った食事は一日一回だけで、山や野ら仕事にはイモの弁当を持参して、腹が空いた時に勝手に食べる習慣だ。今日は我々を歓迎するための特別料理ばかりでなく、男は鳥の毛で頭を飾り（前頁写真）、女は泥を体に塗り首飾りをしての接待であった。

村の外れで男達がのんびりとカヌーを造っていた。良く観察すると先の斧だけは鉄を使っており、ニューギニアの石器時代もここ暫くかもしれない。そうあって欲しい。

我々が内陸奥地を訪れた目的は、原始時代に近い生活を見る事であった。この村は少々の鍋や一個の斧以外は想像通りの生活で、地球上で最も簡単な生活をしていた。

秘境ロッジの夜



内陸の奥地巡りを終えて１６・３０にロッジに帰り、夕食までの一時を隣室の人と旅の感想を楽しく語りあった。今日の見学で初めて秘境に足跡したという感じを接いた点は、誰しも同感のようであった。

世界の中で一番最近になって知られた人種は、ニューギニアの高地人と熱帯ジャングルの内陸の人達ではないだろうか。カラワリ川の地形全般を観察すると、湿地の泥の中に網の目のように根を張る熱帯性植物だけが、我が天下のように他を睥睨している環境だ。川沿いにしか居住できない彼等は、植物の壁に遮られている状況である。

（上は東部セピック州並びにカラワリ川周辺地図）

ゴロカからマウント・ハーゲンまでは道路が開通されて急速に発展した。しかしながら、此のカラワリ・ロッジ周辺から流水に乗って下ったとしても、海岸線までの行程は４００キロはあるだろう（図上の最短直線距離で１３０キロだが、セピック河は蛇行して３倍以上の距離となっている）。

水路以外は殆ど通行不可能な内陸部に、人間が住んでいるなどと思いもよらない事だったのである。ニューギニアの奥地が、世界の秘境として残された理由が判ったような気がすると同時に、植民地或は信託統治時代の統治国が、不毛の地の開拓に消極的だった事もうなずけるのである。

幸いにも第二次大戦後の航空機の発達に伴い、内陸部の奥地にも飛行機による交通手段が緩慢ながら確保され、秘境のカラワリにもセスナ機の発着が可能になった。それに加えて簡素な行政組織も設けられた現在、やがて文明の匂いがする生活物質が浸透し、奥地人の生活を多少なりとも変えて行くかも知れない。

ニューギニアは日本軍が戦場と化した責任があり、浅くない縁があったにもかかわらず、私を含めて一般の認識は極めて薄く、原住民に対して偏見があったことは事実だ。彼等の日常生活は決して活力に富んだものはなく、準原始的な生活を未だに続けていた。しかし今日の彼等を見た限りでは、不幸感などというものは全く感じない。裸は物を落す心配がないのと同じだ。裸で裸足の生活は平等であり、未練に愚痴をこぼす事はないのである。

これに反して文明の恩恵を最大限に享受している我々が、心から満足だと思っている人がどれほどあるだろうか、甚だ疑問に思えてならない。逆もまた真なりで、彼等の井戸の中の蛙といわれる生活は捨て難いのかも知れない。

会話を続けている時、原住民の踊りがあるからとロビーへ集合の声がかかった。昼間訪れたイーマス村の酋長以下六人の男が、最高の儀礼の飾りを全身に付け泰然自若として立っていた。文明国で言えば、最高の勲章を悉く佩用した正装である。昼間の飾りとは雲泥の差があったが、彼等の生活の文化である裸足と裸だけは変わらない。

酋長を中心に左側の二人は、木の実の鈴を着けた蔓製の輪を持ち、右の二人は鳥の毛で巻いた竹笛を持っていた。何れも兄弟と息子である。十五人の人食の経験を持つている酋長は太い杖を持ち、其の直ぐ隣り立っている直系の孫は、自分の体よりも大きい真珠の母貝と大コウモリを身に付けていた。絢爛豪華な一族の威容は秘境の姿とも思われず、覇者の堂々たる風格に驚嘆の眼を注いでいたのである。

支配人の紹介があった後に彼等の余興として、右側の二人は竹笛を吹き鳴らし、これに調子を合わせて左の二人が鈴を振り、昼間の踊りとは一変して厳粛な儀礼であった。

明かりを持たない彼等が、真っ暗な川を手漕ぎのカヌーで渡り、遠い高台にあるロッジまでも訪れ、昼となく夜までも我々を大歓迎してくれた事は、生涯忘却することが出来ない偽らざる感動だ。将に「彼等も人なり我等も人なり」という心の通った一時であったのである。（右下は夜の酋長の正装の姿）

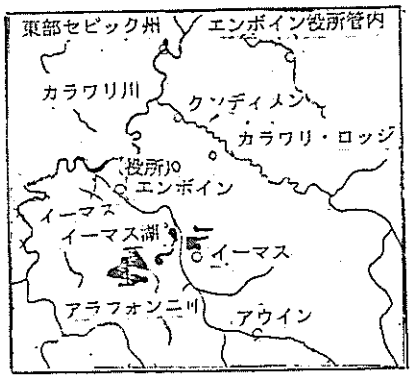
続いて夕食に移ると、卓上に並んだ甘脆の味は其の一部分で満足する程であった。特にヤシの殻の器に入れたワニの肉（尻尾）は最高の醍醐味であり、アマゾンで美味して以来の珍味である。到底、文明社会では口にすることの出来ない酒池肉林だ。

衣を千例の岡に払うというか、今日一日、悠々と自然の中に自適の生活を堪能し、秘境の魅力に心が引かれて早速メモの整を始めた。これは長い間の私の習性だである。

聴き慣れない夜行性の鳥が遅くまでさえずり、遠くの村の太鼓の音もまた何時までも止まず、秘境の夜の静寂なジャングルに反響して、熱帯の奥地らしい独特の風情を感じた。

２０・３０、電燈は消えた。動力発電で仕方なく用意してきた蝋燭を灯したが、「衆蚊雷を成す」というか、沢山の蚊や虫の鳴く声は雷のようにうるさい。吸血攻撃にスプレーや蚊取線香も効果なく、遂に蚊張に潜り込んで白河夜舟を漕いでしまった。

3月11日（水）



濃い霧に包まれたカラワリの谷間に夜明けの歌をさえずる野鳥たち。日本の野山では耳慣れない小鳥の声に眼を覚ました。文化の定義は知らないが、歌や踊りについては人間も鳥類もニューギニアは高い文化を持っている感じがする。西洋音楽の影響は全く関係がなく、彼等の伝統は独自の文化である。

モーニング・コールの代わりに、メイドがミルクとパンを持って来た。温かいミルクを飲んで深い霧に眼を向けると、敗軍の将兵が風の声や鶴の鳴き声にも、敵兵の気配かとびくびくしたという「風声鶴唳」の字句が脳裏に浮かんだ。何時までも鳴禽する野鳥の声が、自然に第十八軍の哀れな敗戦を想起させていたのである。

上流のイーマス村の小学校（上の地図参照）

０９・００に乗船して今日もカラワリ川を遡上すると、大人も子供も川辺で魚を取っている光景が眼に映った。支流のアラフォンニ川に入ると川幅は次第に狭くなり、巨木が空を覆って昼間でも薄暗く、水面もまた隙間がないほど草木が茂り、二重三重にからみあって薄気味の悪いジャングル川である。此の当たり一帯には猛獣はいかいが、ワニや有袋動物はおるらしく、不思議にも蜘蛛の巣だけは見掛けない。

出発して１時間半余り経過すると川は蛇行し始め、高台に高床式のカヤ葺きの家が見えてきた。川岸に１０隻ばかりのカヌーが繋留されていて一寸した部落のようである。

此の上流のイーマス村の土地を踏んだ途端、大勢の子供たちは待ち構えていたようにして出迎えてくれた。川辺から高い丘の上までの細い坂道は、日本の山道のようにジグザクのコースはとらず、真っ直ぐに登って真っ直ぐに降りなければならない。病上がりの私には途中で一休みしなければ到底登れなかったが、親切な子供達は手を引いて助けてくれた。

丘の上に広場があり、美しいイーマスの湖沼が見えて素晴らしい眺望である。此処では結婚式の見学が目的だったが、式は午後ということで小学校に案内された。彼等は時間の観念がなく、午後というよりも準備が出来ていなかったようだ。

人口３００人の村の小学校は児童数８８人だと説明があり、３人の先生も一緒になって歓迎してくれた。学校には貧弱な長机が十数個が並んでいたが時計はない。学校があると知っていれば、時計の一つでも持って来たのにと誰しも思った事だろう。

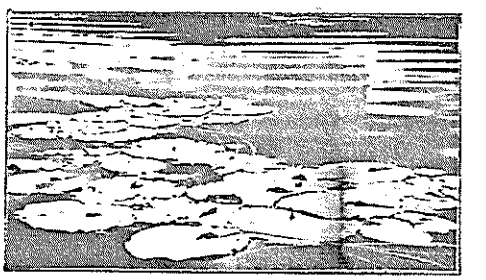
突然「もしもし亀よ亀さんよ・・・」と、日本の小学校唱歌の合唱が始まった。交通の便のない山奥の寒村で、日本の唱歌を耳にするとは夢にも思わないことだ。どうして日本の唱歌が伝わったのであろうか。敗走した日本兵が奥地に入って教えたのか、それとも先生が何処かで覚えて来たのか全く分からない。我々に対して此れ以上の歓迎はなく、誠に有難い事であり感激であった。

学校は６年制で一週五日の授業はすべて英語である。しかし彼等が時間を知り、数を扱い、ものを測るという事は学校では必要だとしても、自給自足の村の生活では一切必要ではない。この点は実に気の毒でならないが、準石器時代の暮らしの此の地まで、教育が普及した事は喜ばしい驚きである。

ピジン・イングリッシュに「ワントーク」と云う言葉がある。「ワン」は一つ、「トーク」は話すという英語から来たもので、同じ言葉を話す仲間という意味である。小学校から国家意識を教え込み、種族間の平和を保つことが大切であると進言したい。

人間は生れつきの性質は大体似ているが、其の後の勉学や環境によって各自の違いが大きくなる、即ち「性相近し、習相遠し」と云う言葉があるが、井戸の中の蛙である此の学校の子供達も、世界や国家に眼を向けて欲しいものである。

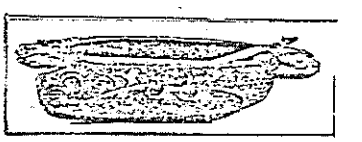
真っ黒な肌にゼンマイ状の縮れ毛をした酋長達に見送られ、午後の結婚式の時間までヤマハ発動艇はイーマス湖巡りに出掛けた。空には白い水鳥が飛びかよい、小さな白い花を着けた水蓮の浮かぶ湖面を走り、珍しいワニの昼寝の跡を眺めて時を過ごした。



四周の山並みを美しく映している湖上で正午を迎え、二隻のカヌーは模合舟となつて舌鼓を打ったのであった。（右は湖面に映る雲と水蓮）

結婚式

再び村に帰って結婚式の見学となった。部落の広場で色とりどりの化粧をした村人が踊り始めたが、外見だけでは男女の区別はつかない。長さ１米ほどの木をくり抜いた太鼓（下の図）を叩く男が中心になり、其の周りを村人が結婚を祝福する踊りから儀式が始まった。どの儀式も同じように、踊りに始まって踊りに終わるのが彼等の習慣である。



広場に面した家のベランダ（階段の踊り場）の上に、花嫁が右側、花婿が左側に胡坐をかいて坐り、其の両側に媒酌人と親が坐っている。仲人は細工を施し飾りを着けた１米ほどの竹を

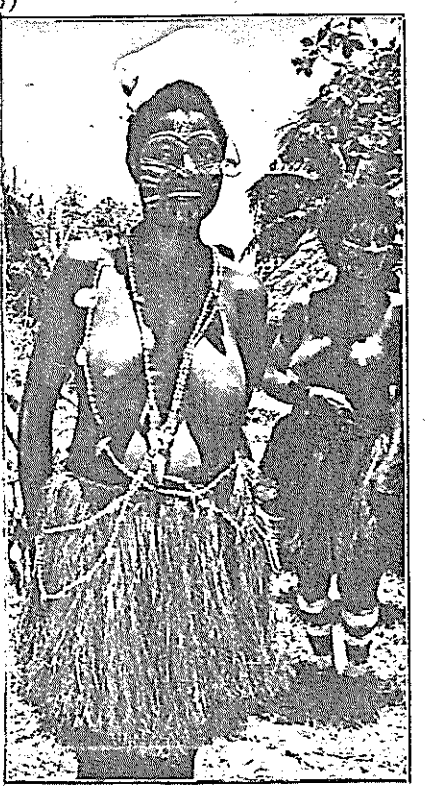
花嫁に贈って、神聖な結婚の儀式が終わる。一方、踊りは休むことなく何時までも続けられている。

不思議な事は、男の子供は男性自身を丸出しで踊っていたが、若い娘達は一人も顔を見せていない。踊りに参加している女性は既婚の人ばかりで、娘は大事な宝であろう。

結婚は部族同志の同意がなければ、当人達がいくら気に入っても結婚は成立しないそうである。勿論、駈け落ちしても行く所がないばかりか、宿敵として殺される憂いさえもある訳だ。（上の写真の左が花嫁、右は仲人）

結婚となると、男の方が父親を通して部族の人達に援助を乞い、部族の男だけで協議して決着をつける。即ち、嫁を貰うための資金というか、贈り物が問題になるからである。

彼等は本人や親或は直系の親族だけで出せるものではない。伝統的な財産である極楽鳥、真珠の母貝、斧類、網袋、豚、毛皮、小さな貝で作った頭や首の飾りなどを、「結納」として贈らなければならないのだ。（下は結婚を祝う女たち）



貝類は貨幣そのものであった。物々交換以外は通貨とされていたから、現在でも其の習慣は続いており、中国の古代によく似ている。貝も種類だけではなく、古さや美しさが基準になるらしい。

そこで酋長や長老が采配を振るうのではないだろうか。ある程度の金持ちで豚や宝の貝、畑などを多く持っている強い男、甲斐性のある男性たちは、部族の行事には人一倍の志を出さなければならない。だから甲斐性のある男は一夫多妻であるようだ。一夫多妻制度は回教徒が有名だが未開の国でも多く、日本の江戸時代までは権力者が大勢の妻を持っていたのと同じだ。

ニューギニアは村が独立した政治単位であり、村同志の敵対関係からの部落戦争で男が減り、妻を財産と考えた習慣が強かった事も原因の一つではないだろうか。

一夫多妻制度で多妻の側はどのように思って居るのか。内助の精神が強い中国では共同の夫を守り立てる意識が

働いていたが、此処でも其の思想かも知れない。各婦人は差別もされずに仲良く暮らしていなければ、多妻制度は成立しない。妻達は育児や食事、そして豚の世話から畑のイモ作りまで働いているが、決して奴隷ではない。家族の一員として重要な役割を果たしており、各自が相応に相寄って調和しているようだ。

夫婦生活は一体どうなっているのか問題が生じてくる。中国では甲斐性のある人は大きな邸宅を構え、別々な部屋に住まわせて居るから其の心配はない。しかし彼等の家を見るかぎり仕切は一切ないのである。

奇妙な話だが、或る部族では男は常に「男の家」に、女も「女の家」か畑に居て、日常生活の中で夫婦が夫婦らしくする機会が少ない。夫婦生活は昼間のジャングルか畑附近という事になっており、蒲団もない男の部屋で青年男女が同会する事は考えられない例外だという。色の世の中に生きている人間だから何かの知恵があるのだろう。

アウイン村の成人式

牛の歩みのように進歩が遅く、起きて半畳、寝て一畳の極貧の生活ながら苦にする事もなく、温柔郷として長夜の歌をうたって暮らす彼等は、誰にも告げたり訴える事のない窮身、即ち、無告の民のように思えてならない。軍靴で踏みにじった国柄だけに、比国に劣らない経済援助を願いながら上流のイーマス村を去った。

川幅１０米ほどのアラフォニン川を遡上するカヌーは、流木の横たわる間隙を手押しで押し上げながら進み、舟底が浅瀬につかえて航行が困難を極め、その都度、操縦手は水中に飛び込んで舟を持ち上げ、数倍の時間をかけて進行した。

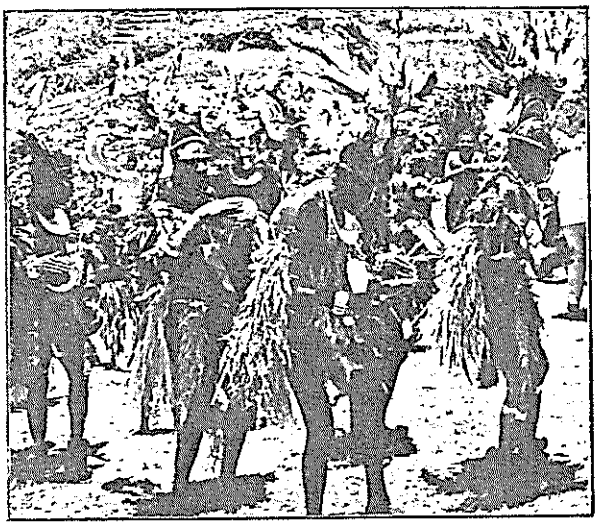
両岸のジャングルに密生した喬木は空をふさぎ、鬱蒼とした原始林は日なお暗い状態の中で、野鳥の宝庫らしく小鳥が飛び交い、「トリの香り」の真っ赤な花が林冠の最高の贈り物であった。

極端に川が右折している森の中に三軒の荒屋が見えてきた。我々を待ち受けていた一人の原住民が舟に乗り込み、航行困難な水先案内人となって船頭に協力する事になった。

次第に仙境に入るに従って、眼に見えない水面下の浅瀬や流木が多くなり、案内人と船頭の二人は殆ど水中に入り切りの状態が続いた。落ちれば同じ谷川の水だが、このような奥地の奥まで人間の生命が存在していたのである。出来る限りの奥地の生活を見たいと念願していた私にとっては、我が意を得たりという心境であった。

漸くカヌーは岸辺の右岸に乗り上げた。見上げるジャングルの鬱然とした中に、一筋の山道が急斜面を登り、全く人里とは思えない幽境の地であった。

隠者が棲むような山奥の洞窟から、八十名の人達が山から下りて此の深閑な山頂に移り住んでいた。結婚式を観賞したイーマス村から一時間も要する天涯の此の地は、無限の峰が尽きるような秘境中の秘境である。この世俗を離れた大自然から見ると、すべての人間の生命は流れる水のような感じがして来た。ニューギニアには未だ発見されない少数民族が存在している聞いていたが、彼等も最近になって見付け出された部族かも知れない。



此のアウイン村も亦、川辺からの急斜面を一直線に登攀しなければならず、谷深ければ山高しは当然のことだと無心になって足を運んだ。

頂上に少しばかりの平坦地が開けていた。そこで弓矢を持った精悍な男達は皮を張った太鼓を叩いて踊り始めた。頭上の鳥の羽根は戦意を駆り立て、腰に巻き付けた葉っぱは勇壮を現わし、すべてが闘争心に燃える部族の力を鼓舞していた。戦争は彼等の楽しみのようである。（上は部族の踊り）

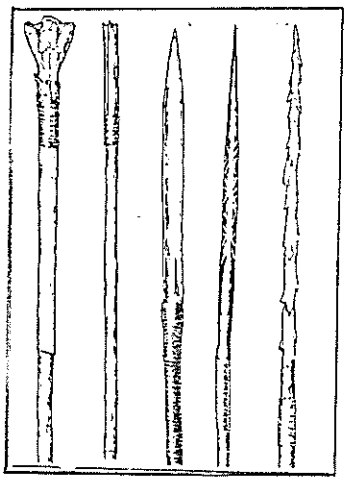
成人式を迎えた青年は手に十数本の矢を握り絞め、頭は極楽鳥の羽毛で覆い、鼻は獣の牙で飾り、首には三段になった真珠の母貝を吊るし、顔を真っ黒に染めるという壮士然とした出で立ちであった。（下は成人式を迎えた青年）

不思議なことに此の村では、大人の女性は勿論のこと少女までも腰ミノをまとい、男の踊りに背を向けて立っていた。踊らないばかりか厳粛な男の成人式を見ることも許されていない。この村の定めた習慣である。

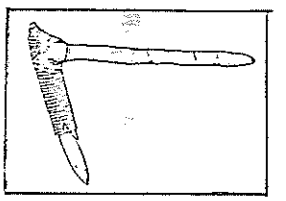
自分達の部落や種族に対する彼等の誇りは極めて高い。誇り高い部族が群雄割拠しているから、戦国時代のように何時か何処かで戦争が起きていた。

青年が成人男子として一人前に扱われる為には、戦争で敵の部族の男を殺し、其の首を土産にするというような激励の意味で、成人式を挙行するのである。現在の日本の

成人式とは趣が異なり、明治以前の武士の元服式に似た感じである。踊りは三十分ほどで終わり、我々も彼等の輪の中に合流すると喜色満面で迎え、彼等の身に付けた弓矢や装飾した物を手に取って観察する事が出来た。枯れたアシの茎で作った矢には羽根がなく、真っ直ぐに飛ぶとは考えられない。弓の弦もまた竹の表皮を細く削ったもので、我々が考えているほど弾力性がない。これでは至近距離の戦闘にしか役に立たず、鉄製の刀剣がない彼等の戦闘は肉弾戦しかできない。（右はヤジリの各種。右二本は戦闘用、中央は戦闘・動物用、左二本は鳥類用）



家の横に立てかけてあった棒を指差して尋ねると、一人の男は其れを持って土を掘り起こす動作をしてくれた。両手で力一杯地面突き刺して、テコ式に起す農具である。木の枝の分かれた部分を利用して柄を作り、頭の石斧は蔓で縛ってあったが、石器時代の面影が未だ残っていた。（右下図）



自分と自分の影を見ながら慰め合っているような、寂しい生活をしている小さな村の人達は、一行が再び下り坂を降りて行くと大勢の者が付いて来た。カヌーに乗った我々に手を振って別れを惜しむ姿に、何とも言えない憐れみを感じたのである。早速、持参して来た菓子を与えて此れに応えたが、彼等と暫く接した余韻が長く尾を引いていた。

カラワリ離別の夜

井中に火を求めるような万里の彼方にある秘境を訪れて、初めて「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」という感じを味わった。浮き世を離れた原始生活の名残を嗅ぎ、自然のままで人工の加わらない「柳は緑、花は紅」の生活をする彼等に、大きな魅力を感じたのと同時に、人間としての悲しみというか、心底より満腔の同情を覚えたのである。今までになく深い想い出は無量であった。

酒池肉林の夕食を終えると今夜も亦、声なくして人を呼ぶというか、多くの部族の人々がロッジに集まって、盛大な歌と踊りの会が始まった。鵬程万里の異邦から客人が訪れてきたと相逢い相迎えて踊り、別離の時が来たと歓送の会を催して踊り続け、我々一行を笑殺させてしまったような夕べの一時は、世塵を吹っ飛ばすほどであった。

生まれて此の方、書物を半行も読んだ事もない彼等の心中を察する事はできないが、何事も人の和にしかずと踊りまくっていた。慌ただしく夢を見て四苦八苦する文明人に何を

訴えているのか。すべての人間を保護してくれる天は一つ、世界は一つだと、教えていたと考えたいのであった。

カラワリ・ロッジを訪れた客は、今日まで日本人ツアーの四回に他国のツアーが一回だという。戦争の怨みに報いるのに徳を以ってするというのか、心の底から陶酔させてくれた彼等の愛情は、誠に旺盛であり感謝に耐えない。逢えば必ず別れる時が来るのは致し方ないが、何時までも親愛の変わらない耐久の友として交わって行きたいものである。

踊りの続く中を一人部屋に戻り、時間を考えながらペンを走らせてメモを整理した。文章は情によって生まれ、情はまた文章によって発動するものだが、我が文才の不足を嘆くばかりで、遅々として進まない。白鳥は水浴びをしなくとも白いように、彼等は本性を飾らずに、自然から出た其のままの姿を見せてくれたと書き出した。

今回の旅行で只一つ云える事は、歓迎の余りに催しが多く、もう少し日常の自然の生活が見たかったことだ。勿論、絶大な熱意の歓待には衷心より御礼を申し上げなければならない。我々と天地のように懸隔した彼等の暮らしから、活を求める生命力の強さを見出すことが出来たらと、メモを締め括ったのであった。

つまらない贈り物でも感謝と友好の意を表わす意味から、ロッジの支配人の白人に日本の箸とラーメンを進呈し、挨拶を交わして再び部屋に戻った。室内まで響く野鳥の鳴き声は雑念をはらい、疲労を覚えて静かに枕に就いたのである。

3月12日（木）

カラワリからモレスビーへの帰途

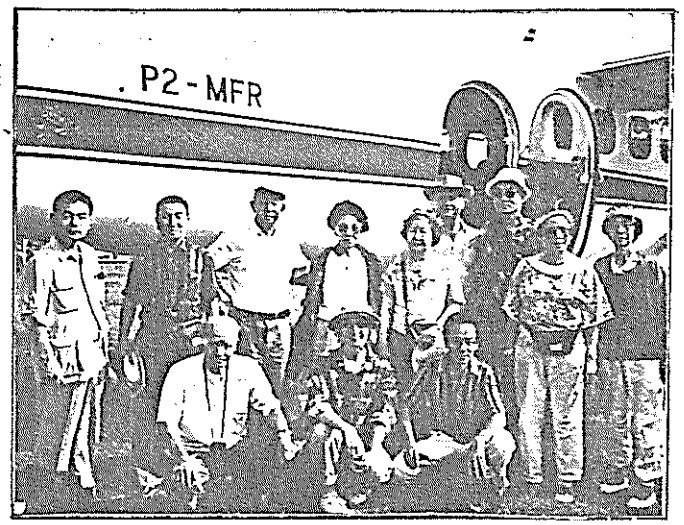
足を万里の流れに注いだように、文明から遠く離れて暮らしたカラワリ・ロッジは、今朝もまた、眠を覚ませと催促する小鳥達のコーラスから始まった。夜明けの清々しい大気は悠然とした自然の緑を覆い、光風斉月の心境に私を導いてくれていた。

今日はボーイがミルクとパンを持ってきた。文明の余光を分け与えると言うような積りでなかったが、残ったローソクとミカン、リンゴを進上したところ、破顔の笑みを浮かべ、特訓で覚えた片言の日本語で礼を述べて、懸命に感謝の意を表わしていた。

朝霧も晴れ上がり、遠くの太平洋の彼方まで無限に続くジャングルは、世上の煩わしさを忘れさせたが、またもや安達第十五軍の白骨戦線が脳裏に浮かび、次ぎの一句を詠んだのである。

密林のひかりなき土と化(な)り果てし　戦友(とも)あまた顕(た)つニューギニアに来て

いよいよ別れの時を迎えたが数々の忘機の景観に名残が尽きない。懐かしい山荘を降りてカヌーに乗船し、偏私なく万物を照らしている陽の光を浴びながら、緩やかに流れるカラワリ川を走った。明鏡止水の字句のとおりの眺めも終わりだ。



一行を待ち受けていたチャーター機を背景にして、支配人を交えた記念の撮影を終え０９・３０に離陸した。（右は記念写真）

機は想い出のロッジの上を飛び、昨日訪れた村や湖沼が眼下に見えて来た。曲肱の楽みというか、貧しい暮しをしている彼等の姿は、生涯忘却する事が出来ないものばかりで、機の下を飛んでいる野鳥までが、我々を見送っている感じであった。次第にカラワリ川も遠くなり、再び羽化登仙の飛行に移って帰路に就いたのである。

十時すぎにマウント・ハーゲン空港に着陸して、国内航空の便を待つことになったが、二日間行動を共にした白人女性は此処から別行動となり、一行の一人一人に握手をして礼を述べていた。カラワリの彼女の思いも我々と違いないだろう。

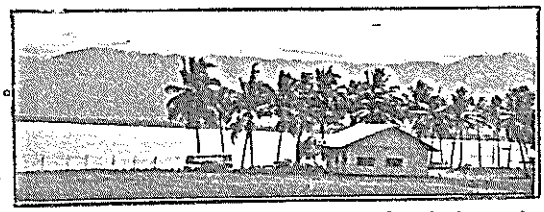
１２・００、ポートモレスビー行きの国内便は飛び立つた。瞰下しているハーゲン地方はカラワリとは天淵の差があり、道路が走って緑の耕作が拡がっている。道路の建設が発展の原動力だということを如実に示しており、内陸奥地の道路開発こそ焦眉の急である。

往路の観察と復路を観察する見る目も異なり、往復して初めて本当のことが観察できるのと同様に、人生の折り返し点を過ぎて復路を送っている我々は、世の中を見る目が備わっているだろうか。下界を見つめて大いに反省させられたのであった。

偶然にも急患が搭乗している姿を眺め、医療施設の貧弱な此の国では、患者輸送の為にも航空便の拡充を願いたいと思いながら、配られたお粗末な機内食を口にしていた。それにしても現地人は裸足のままで搭乗し、機内までも原始生活を持ち込んでいたのは驚きであり、本当に世界の谷間のどん底の生活程度である。

二十分ほど経過するとゴロカの町が見え出した。乾期の性かマーカム川の水は少なく、茶褐色の川床と草原が展開し、ラエ周辺の激戦地は近いと胸を弾ませて待機した。前記したようにラエは第五十一師団や第二十師団の死闘の跡である。今日こそはシャッターチャンスをと期待して、血眼になって地図を想起していた。

左手に第五十一師団が追い詰められて山越ししたサラワケット山脈が明瞭に姿を見せていた。（１４頁参照）一ケ月以上もかかった想像に絶する退却だったのである。ラエ空港の着陸態勢に入った機内から、死中に活を求めて戦った海岸線の写真を、数枚撮ることができたのは実に幸運と云わなければならない（上の写真はラエの海岸）。また停止した機内の窓から墓地が見えていたが、米豪軍のものか、それとも日本軍のものかは知る由もなかった。



パプアニューギニア第二の都市のラエには、カヤ葺の光景だけは見られなかったものの、人家は至って少なく寂しい街である。しかし民間のセスナ機の数は三十機を下らず、恐らく白人経営者達の足ではないだろうか。道路は空港周辺を取り巻き、通行する自動車も見えていたから、此の国としては大都市に違いないようだ。何れにしても過去の禍を忘れ、太平洋の良港として長足の発展を祈りたい。

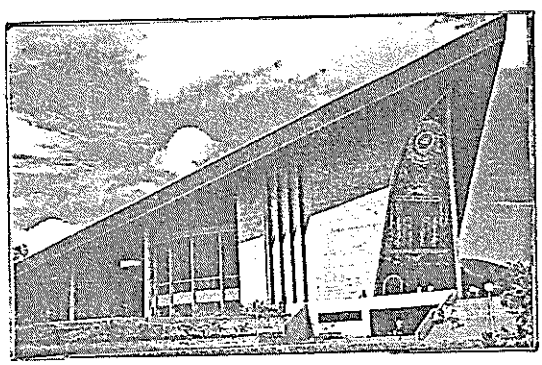
ラエを去ってモレスビーまでの三十分、再び南海支隊の「死を視ること生けるが如し」と奮戦した戦闘経過を偲びながら、行く手の山並みを眺めているうちにジャクソン空港に着いたのである。

「送る月日に関守なし」というか、期待していたゴロカ～マウント・ハーゲン～カラワリの旅も、あっという間に過ぎ去ってしまった。

ポートモレスビー

１４・００、再びモレスビーの土を踏み、国会議事堂、国立博物館、国営民芸品店の見学となって、先ず国会議事堂に案内された。

芝生の敷きしめた広場の一角に、正面を美しい模様で画いた三角屋根の建物が聳え、精霊の家を型どった此の建物が国会議事堂である。１９７５年９月１６日、地上最後の秘境と云われた国が独立して新しい一歩を踏み出し、国権の最高の府として今後に期待を掛ける殿堂だ。（右は国会議事堂）



正面のモザイクには各部族の特徴を表現した人間像、各種の動植物、河川の流れ、生活様式等が画かれ、足跡を残した旅の光景を再現していた。幸いなことに守衛は扉を開いて内部の見学を許し、種々と親切な説明をしてくれた。

定員１０９人からなっている一院制議会で、議員の任期は５年。独立後最初の選挙が１９７７年に行われ、８２年に第２回目の総選挙が実施されて野党連合が勝利を収めた。州は１９州あって大臣の数は２５であるという。

政党はパング党、国民党、人民進歩党、連合党、パプア・ベセナ党などの多数の政党に分化しているが、何れも基本的には、地方勢力ワン・トク（同一語を使用する集団）を母体としながら発展して来たものである。したがって、多党制が此の国の政党政治の特徴であり、政権の交替はあっても政治不安という状態ではないようだ。

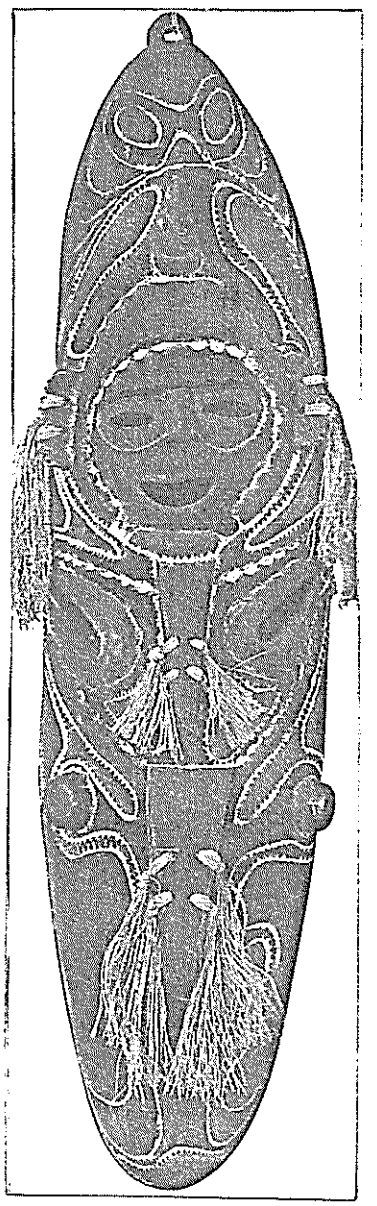
国内政治の面では産業振興が最大の政策目標であって、地方産業の育成の為の大幅な権限委譲が行われており、治安対策にも力を入れている。前記したように都市に人口が集中し、失業に基ずく犯罪などの都市型の犯罪が多く発生している。内陸部では屢々部族間の闘争が起るが、現在の警察力では、これらの事件の発生を完全に統制するだけの能力はないようだ。

議事堂の横に建っているのは国立博物館である。ここも同じく精霊の家のような三角屋根の建物で、正面に精霊の面などが画かれていた。館内には石器時代の面影を残す、何万年もの長い間の原始美術が展示され、価値の多かった旅を終わって拝観すると一段と興味深い物ばかりであった。

時の流れが止まっていたように、進歩のなかった赤道直下の此の国は、独立以来すべての方面に最新な技術を導入しており、議事堂や博物館の建造物も其の一つの結果ではないだろうか。施設の充実ばかりでなく、中味の充実と機能の発揮を期待しながら館を去ったのである。

バスは一行を国営民芸品店に案内し、パプアニューギニアの最後の見学場所となった。此処は我々が足跡しない地方の民芸品を含めて、大規模な展示即売場となっている。

ニューギニア航空は荷物の重量制限が厳しいという事で物色するのに時間を要したが、私も精霊の面や斧などの数点を求めて記念にした。（右は精霊の面）



しかし今後のツアーの為に、ハイランドやカラワリに出掛る前に、前以て案内すべき所だと意見を述べておきたい。

それにしても大展示場は閑散として客は少なく、観光立国の点からも大いに宣伝に努めて欲しいものだ。以上でもって総ての観光は終わりを告げたのである。

２０世紀に準石器時代のような生活をする国民一同が、極楽鳥の羽ばたく色鮮やかなパプアニューギニア国旗に劣らない、新しい国家の建設に邁進される事を祈りたい。

夕食はワールド航空主催の晩餐会が行われ、茨城県出身の若い夫婦が経営する日本料理店「大黒」が会場であった。

数の少ない一行は、終わりを完うするように羽觴を飛ばし、鶏黍を口にして心腹の友のように語り続けた。気候風土の異なる未開の国を廻り、一人の故障者もなく帰還できた喜びが一段と雰囲気に加勢し、和気靄々な会は時間の経過も忘れるほどであった。

同じテーブルに着いていた日本の海外協力隊の青年三人は、故国の味を偲んで盛んに箸を口に運び、現地人や白人もまた器用に箸を使っていた。僅か一年でこれだけ商売繁盛しているのは誠に結構なことである。

眼を下の方に向けると、日本のハッピーを着た現地のサービス嬢もまた裸足だ。畳を敷いた座敷でなくテーブルの食堂だから支障はないが、日本情緒を出す為にも下駄や草履を履かすべきだと、提案しておきたい。

価値のないものに過ぎないが、此処でも店に掲げるようにと、主人に東海道五十三次の絵を贈ったところ、パプア特産の壁掛けを返礼として差し出し、恐縮して有難く頂戴した。一層の発展と健康を祈って解散となる。

３月１３日（金）

帰路に就く

０７・００、モーニングコールで飛び起き、窓を開けて新鮮なモレスビーの空気を腹の底まで吸い込んだ。水平線の彼方に昇る旭日は白一色の白亜の町を照らし、プールの水面もまた陽の光に映え、海波を揚げない海面に大きな舟が航行して、抜山蓋世の気分を味わっていた。

１０・００、ニューギニア航空ＰＸ０１０機はジャクソン空港を飛び立った。

「地上最後の秘境」「人食い人種」「首狩り」等の宣伝に好奇心がつのり、また十数万の英霊の眠る地を慰霊したいと訪れた７日間、実に合縁希縁だった旅も春夢のように過ぎ去ってしまった。名残を惜しんで機内に入り、再び極楽鳥を色鮮やかに染め抜いた、スチュアーデスのロングドレスに見惚れながら、マニラ経由で成田空港に向かったのである。

あ と が き

我々はパプアニューギニアに対して、未開の国という印象を先入観として持っていた。

今回の訪問地はモレスビーを除くと、内陸部の東・西部高地とセピック河支流カラワリ川の奥地だけで、発達していると推測される海岸部は未踏である。限られた地域を一週間で視察して、全般を評するのは群盲象を撫でるに等しい。

しかし我々の歩いた地域に限ると、確かに先入観と同じだと結論しても過言ではあるまい。特にカラワリ周辺では、正真正銘の原始生活に近い生活に接したのであった。

石器時代の面影を其の儘に、自然の中で生きている原住民たち。何千年もの長い間、変わらずに営まれて来た彼等の原始社会は、我々に時の流れを忘れさせてしまう程であった。

雄大な大自然は偉大な人間の生命力と生活文化を生み、野生生物の楽園となり、国土の大部分を占めるジャングルは、これも時の流れに押し流されずに其の生態を留めていた。

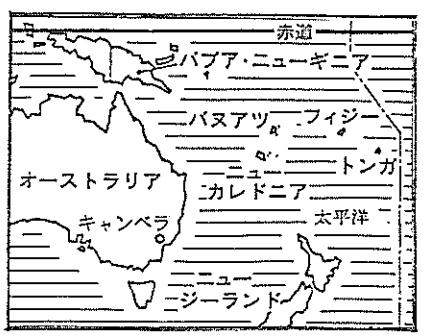
ハイランド地方に於ける部族対抗の殺人闘争事件は、原始社会の歴史を目の当たりに見せ付けてくれた。カラワリ川上流のパン作りは原始生活の影を残し、成人式や結婚式、神への感謝と祈りの儀式もまた、昔の姿を再現してくれた。

頭は極楽鳥などの赤や黄色の羽で覆い、鼻輪、貝殻などで身を飾り、色とりどりに顔を塗った原始美術や文化、アサロ渓谷の泥人間の魅力は、計り知れない想像以上のものであった。これらは何時までも私の脳裏に刻まれているだろう。

２０世紀の石器時代と云われた彼等が、他人種の支配から独立して１２年、多難な前途を克服して富国の道を探り、劇的な変貌を遂げて発展の基礎を強化し、繁栄を期待して止まない。勿論、創痍未だ癒えない此の国に対して、日本の絶大な経済援助は当然の責務だ。

一方、眼を国外に向けて見ると、南太平洋に新しい火ダネが播かれており、激動する国際情勢に注目しなければならない。

ソ連の進出で揺れている南太平洋に、最近新たにリビアの活動が活発化して、バヌアツと国交を樹立したのである。非同盟中立を政策としているバヌアツとの接触を足場にして、リビアはニューカレドニア（仏領）の独立運動にも介入の動きを見せ出した。



フィジーも去る総選挙で野党連合が勝利を収め、非同盟中立、米核艦船入港拒否、イリアン・ジャヤ（インドネシア領）独立運動支持を公約している。前政権の親米反ソ政策は後退し、ニュージランドに続く核艦船拒否である。フィジーは英連邦国家として独立以来１７年間、

親米的な政策をとってきた。此のフィジーの影響を受けてソロモン諸島、パプアニューギニアも、米核艦船入港拒否が広まる可能性が出て来ており、南太平洋の大国オーストラリアでさえも、神経をとがらせているのである。

リビアは北アフリカ、中東に次いで南太平洋にテロリズムを撒き散らし、不安定化を目的として狙っている。バヌアツに続いてフィジー、パプアニューギニア、ソロモン諸島、トンガにも国交樹立を働き掛けており、イリアン・ジャヤの独立運動にも接近している。

南太平洋地域は、何れも独立後間もない小さな新興国家群だけに、ソ連やリビアの影響を強く受けると、たちまち政体が変わりかねず、テロと無縁であった此の地域の過激化が心配である。パプアニューギニアも民族の将来を考慮して、戦争に巻き込まれないように行動をして欲しい。

この紀行文をワープロ中に、誘拐されていた三井物産マニラ支店長の若王子氏が、３月３１日夜、１３６日ぶりに開放された。誠に喜ばしい事である。

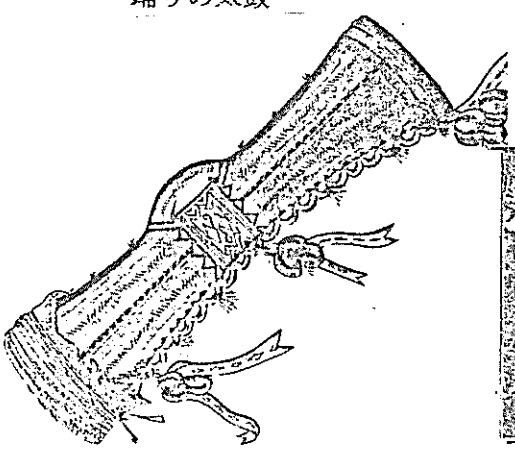
旅は私にとっては師である。魚の釜中に遊ぶように生年は百に及ぶ事はないのだ。

李白は「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客」と桃花園で宴した序文に記している。天地は凡てのものが来て宿る宿屋のようなもので、流れて行く月日は百代永久に次々と過ぎて行く旅人であり、ひとたび去ってしまえば帰らない。だから彼は淋しさを克服しようと旅を続けていた。

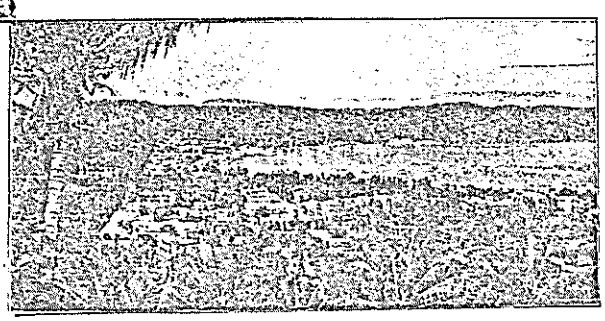
李白のように、これからも我が境遇に応じて旅を続け、耳に美しく聞き目に美しく眺めて、陽炎のような残りの人生を楽しみたい。楽しみは新しく相知るより楽しきはなしだ。

紀行文を書き終って、他の人々の文と比較して我が能力の不足を恥じ、幾度となく焼き捨てたい気持になったが、今回も亦、赤面を押して綴ってみた。

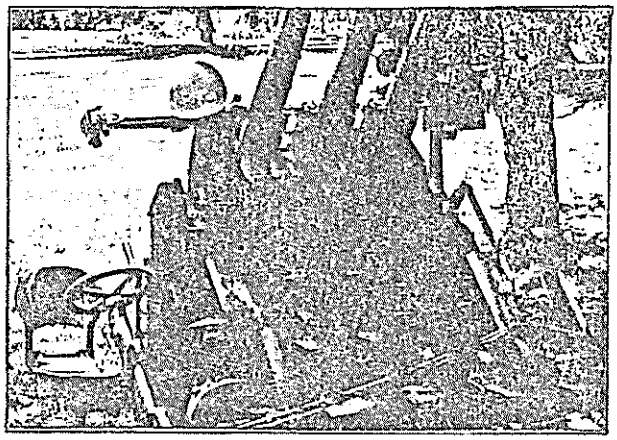
踊りの太鼓



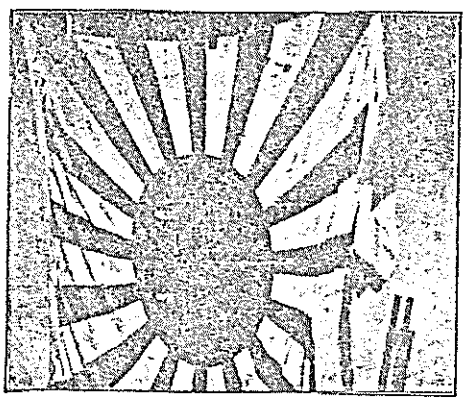
パガ台地よりポートモレスビーを望む



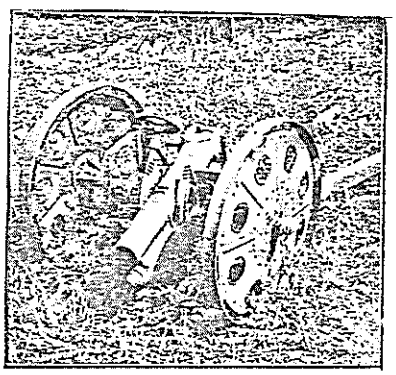
今も日本軍の残骸を残している



日本軍高射機関砲

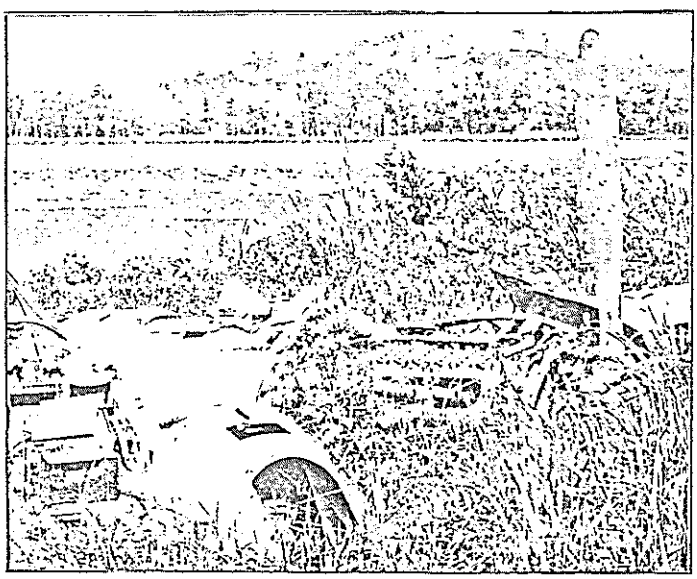


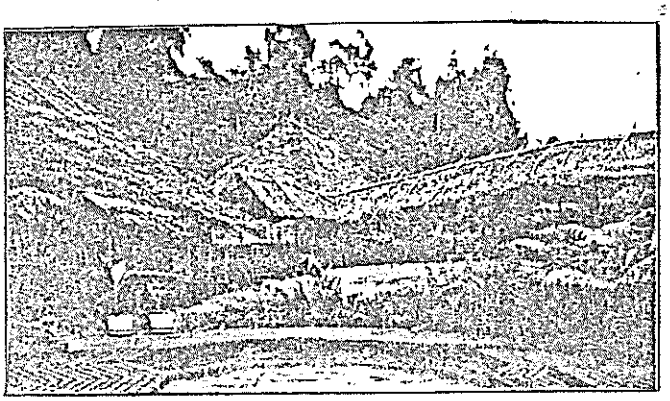
日本海軍々旗

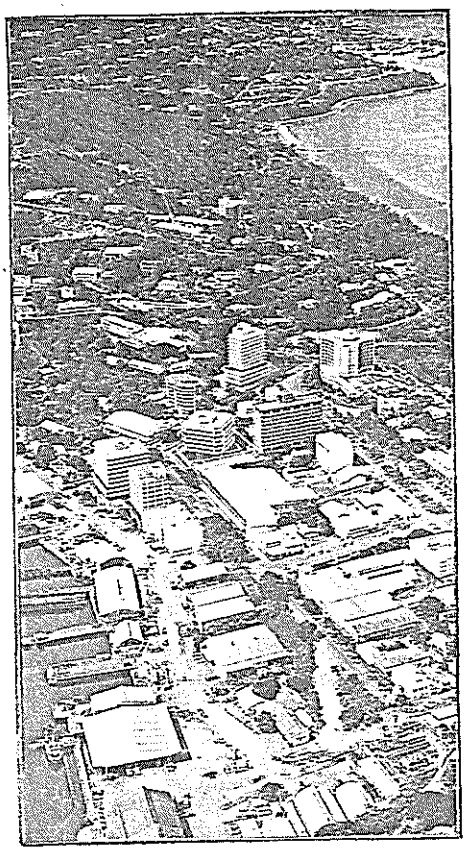


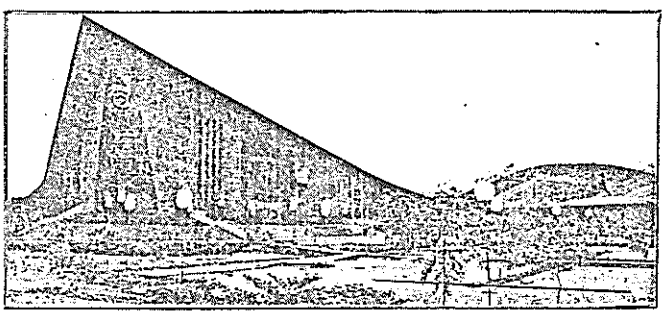
日本陸軍大隊砲

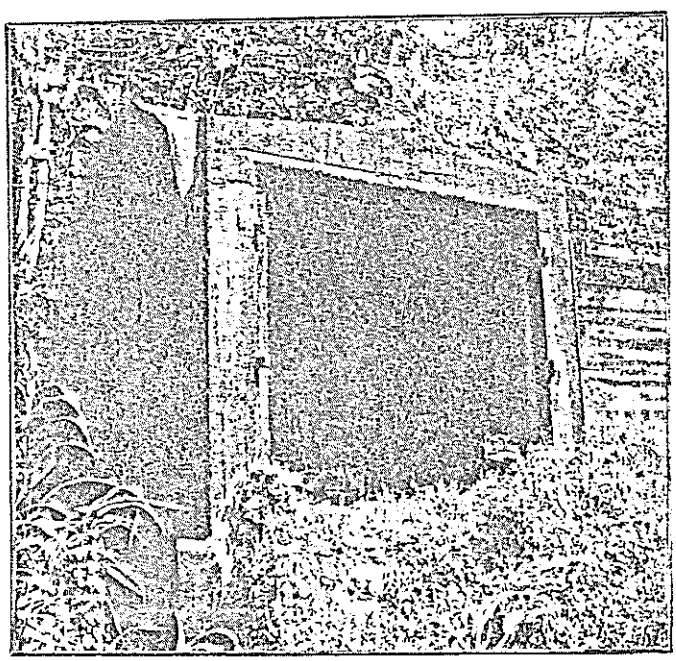
日本軍戦闘機



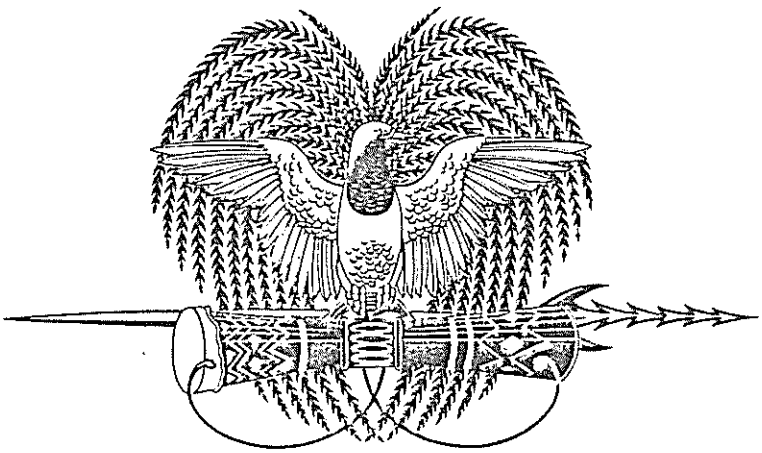


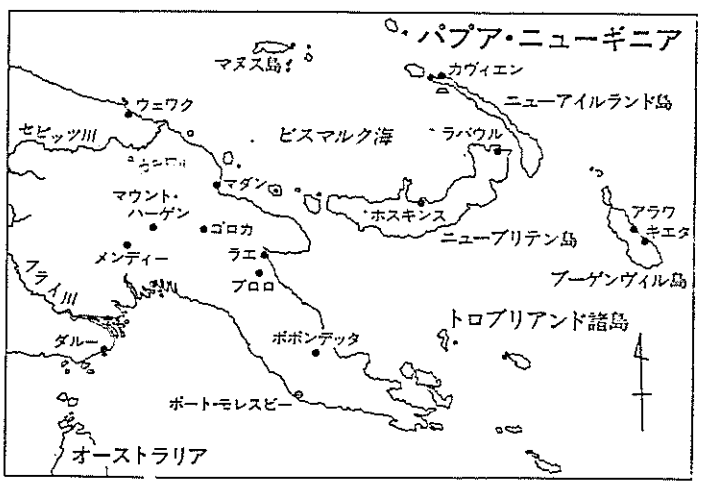






左上　カラワリ・ロッジ
左中　国会議事堂
左下　日本軍防空壕
右　　ポートモレスビー
　　宿泊したホテルは
　　写真中央右側




パプア・ニューギニア
マヌス島
カヴィエン
ニューアイルランド島
ウェワク
セピック川
ビスマルク海
ラバウル
マダン
マウント・ハーゲン
ホスキンス
ニューブリテン島
アラワ
キエタ
ゴロカ
メンディー
ラエ
ブーゲンヴィル島
フライ川
ブロロ
トロブリアンド諸島
ポポンデッタ
ダルー
ポートモレスビー
オーストラリア